自動車が音を立てゝ來た。內に小原君はのつて居た。小原君が小林畫伯を見て下りて來た。

「小林、そして東京へ行つてドール孃を何處に置く積だ。」

「まだそれ迄は考へて居ないのだ、とにかく行先は君の家に知らせて置く。何分たのむ。何しろ毛唐ばかりならいゝが、坂上と云ふ奴が居るので危險千萬だ。」

「さうだ。あいつが曲者なのだ、あんな事を云つて居るが、恐らく毛唐とぐるになつて森ドクトル迄も恐喝して居るのだ。」

二人の立話の間にホテルの玄關にドール孃が現れた。小原君はそれを見出して云つた。

「おい、戀人が出て來たぞ、俺は逃げてる方がいゝだらう。」

「勿論だ。マルグリツトは君をけむたがつて居るだらう。」

「おや〳〵。まアそれではごゆつくり願ひますぜ。」

小原君はかう云ひ殘して姿を消して了つた、小林畫伯は自動車の運轉手に命じた。

「ドールさんをお迎ひに來ましたと云つてホテルへ行つてくれ給へ、僕も一緒に行くのだが、此處で待つてるから。」

運轉手は爆音を立てゝホテルの玄關に自動車を動かして行つた。小林畫伯は遠くドール孃の出て來るのを待つて居た。

しばらくしてドール孃が、ホテルの玄關から外迄出て來た。ドール孃は灯蔭に立つ小林畫伯を見出して近づいた。

「電報が來て居ました。どうしたらばいゝでせうか。私の事を今迄色々心配して居てくれた坂上と云ふ人からなのです。」

ドール孃は電報を小林畫伯に渡した。小林畫伯は坂上ときいて大分興味をもつて街燈の下によつて讀んだ。

「……コエンスキー等の留守に逃げて、東京帝國ホテルへ來れ。危險せまる。」

小林畫伯は默つて電報をドール孃に返してドール孃の顏を見つめた。ドール孃はすぐに小林畫伯の心を讀んだ。

「私、こんな電報なんか、もう必要がないのです。あなたが居て下されば、私あなた以外の方にはたよる積になれません。」

「さう決心をすれば、それでいゝのだ、さァ出發しやう。」

ドール孃は又ホテルの玄關に引き返して自動車にトランクをつみ込んで出て來た。自動車は相思の二人をのせて闇の大谷河畔をとぶ樣に走つて居た。小林畫伯は右手をドール孃の頸に廻して、二人はしつかりとよりそつて居る。

「セーブルからの歸りの樣ですね。」
「よくおぼえて居るね。あの時も今夜の樣な闇夜だつた。」
二人は段々とフランスに居た頃の思出を語り合つて居た。

雨後

一

日光の湖畔ホテルの玄關に夜十時一臺の自動車がとまつた。あたふたと其自動車から降りたのは刺青の男であつた。
「ドール孃に至急逢ひたくて來ましたが。」
かう云つて刺青の男は名刺を出した。ボーイ長は一應刺青の男を見直してからかう云つた。
「ドールさんは先刻お立ちになりました。」
「え？ どこへ。」
「さア、どちらへかは存じませんが、急用でもお出來になつたと見えて、突然お立ちになりました。」
刺青の男は不思議さうに頸を傾けた。

「お一人でしたか。」
「どなたか一人男の方が外にお待ちになつた樣でした。」
「荷物は？」
「みんなお持ちになりました。」
刺青の男はいよ〳〵分らなくなつて來た。
「コエンスキーさんは？」
「あの方は今日正午頃東京へお立ちになりました。まだお荷物は置いてあります。」
「さうですか。」
刺青の男は全くドール孃の行動を理解する事が出來なかつた。コエンスキーを東京に誘ひ出して、その留守をねらつてドール孃を救ひ出す積で、此處迄刺青の男は來たのであつた。
「外に待つて居た男と云ふのはどんな人なのです。」
「さア、それは分りません。とにかく何か急用がお出來になつたのでせう。勘定などもみんなすまして、もうおいでにならぬ樣な御樣子でした。」
刺青の男は段々と不安になつて來た。コエンスキー達はなか〳〵のしたゝか者である。或はもう自分の心中を見ぬいて、先を越してドール孃を逃がして了つたのかも知れないとも思はれた。

「行先は全く分りませんか。」

「それは分りません。手紙はフランスの大使館へ廻送する樣にと賴んでいらつしやいました。」

刺青の男は途方に暮れた。今迄の努力も全く水泡に歸して、ドール孃がコエンスキー達の誘惑で、既に全く自分等から手の届かぬ所へ隱されて了つたのを思つた。彼は相當に自分のかう云ふ場合に處する手腕を自信して居る男であつた。然し今は全く施すべき策を知らなかつた。

それでも尙彼は咄嗟の場合氣をとり直した。今は一刻も猶豫すべきでないと思つた。すぐに東京に引き返さなくてはならない。そして先づコエンスキーの動靜をさぐらなくてはならない。コエンスキーをだまして上京させて了つたのに、却つて彼の術策に陷つて了つたのは刺青の男としては、實に殘念でたまらなかつたのである。

――よし、智慧比べならば決して彼等に負けやしない。特に問題の中心はドール孃である。今迄は自分の感情は押しかくして來た。然し今日からは自分の愛人と意識してドール孃を救はなくてはならない。

刺青の男はくじけかゝつた心に元氣をつけて、ホテルから飛び出した。そして夜通しでも東京に歸る決心で、自動車を求むるために街道に出た。

彼はホテルの前の街道を二三町歩いて一輛の自動車屋を見出した。彼が既に立てられて自動車屋の

ガレーヂの戶を打たんとした時、今迄見えがくれに彼の後をつけて來た男が、彼の後から聲をかけた。

「坂上さんではありませんか。」

彼は突然自分の名を呼びかけられて驚いて、後を振り向いた。

「あゝ、小原さんですか。あなたは何のために……」

と云ひながら、刺青の男は、小原君の登場がドール孃の出發に何等かの關係のあるのを直覺した。

小原君は其時先を越して云つた。

「君はドール孃を誘ひ出しに來たのでせう。」

刺青の男は小原君の此言葉に含まれる眞意をさぐるために、小原君の顏を見つめたまゝ、しばらく答へなかつた。

「ドール孃はホテルに居ましたか。」

小原君は續けて云つた。刺青の男は考へた。こんな場合には無策の策に限ると思つた。

「居ないのです。先程荷物をまとめて出發したさうです。あなたはそれを御存じですか。」

「さうですか。一向知りません。」

小原君の返事はわざとらしい程冷靜であつた。

「小原さん。あなたはドール孃を迎ひに來たのぢやないのですか。」

「まアそれも考へて居ましたがね、居なくなつたならば今更ら仕方ないでせう。」

此言葉は眞實を語る調子であつた。

「たが小原さん、あなたは昨日東京で日光へは來ないと云つて居られたでせう。それをどうしたのです。」

「あはゝ、それは私だつて汽車にのる位の自由はもつて居るのですからな。」

小原君の答は皮肉の調が混じて來た。

二

「小原さん。」

刺青の男は小原君の言葉に棘のある乘を知つて、不愉快になつて來たが、問題はドール嬢の危期に關係があるのを思つて、心をおちつけた。

小原さん、私はドール嬢の事を本氣で心配して居るのです。かくさずにすべてを話して下さいませんか。或はあなた方がドール嬢を誘ひ出したのならば、これ程うれしい事はないのです。」

「そんな事はありません。小林だつて今はドール嬢の事をあきらめて居るんですから。」

「さうですか。それならば、いよいよドール嬢の身は危險です。かうして居てはならないのです。私

は今から東京へ行かなくてはならない。」

刺青の男は自動車やの戸を打ち出した。内から返事があつた。小原君はまだ刺青の男を警戒して居た。小林と一緒に逃げたドール嬢が、安全な地に身をかくす迄は、此男を上京させては都合が惡いと思つた。

「今から東京へ行つたつて仕方ないでせう。それよりは惡人達がこちらへ歸つて來るのを待つて、おもむろにさぐつた方がよくはありませんか。」

刺青の男は小原君の言葉をきいて、或はその方が策の得たるものではないかとも思つた。

「さうですな。たゞ東京の方も心配なのです。」

「では僕が東京へ行きませうか。」

小原君が眞面目に云つた。

「ではさう願ひませうか。コエンスキー達は、森さんを恐喝する事には相當に熱を持つて居る筈なのです。それを心にとめて探偵して戴けば、自然ドール嬢の行方も分るでせう。では東京の方はあなたにお願ひします。私はしばらくこちらを警戒して居ませう。」

自動車屋が起きた。

「大至急ステーション迄。」

刺青の男はかう云つて料金を先拂ひした。

「では小原さん、何分お願ひします。」

小原君は自動車にのつた。そして自動車が動き出した時、長い舌をペロリと出した。何と云ふ馬鹿氣た男だらう。蓋し天下のドンキホーテである。今頃は小林はドール孃と東京に到着したであらう。それも感付かずに、自動車代迄も拂つて、俺を東京へ送るとは……

小原君はゆれる自動車の窓から雨後の月に光る大谷川を見て居た。

刺青の男は小原君の自動車が見えなくなる迄、街道に立つて居た。考へて見ると小原の行動には合點の行かぬ所がある。彼は急に思ひつく事のある樣にスタ〳〵と急いで、又ホテルへ入つて行つた。そして空室のあるのを幸、一泊する事にした。通された室はせまい室であつたが、先住の殘したコチィの香水の香が殘つて居た。彼は案内して來たボーィに賴んで、東京の森ドクトルを至急電話でよび出した。

「今日誰か行きませんでしたか。」

「さつき來ましたよ。例のコエンスキーと云ふ奴が。」

「そして何と云ひました。」

「相變らず恐喝するのです。私はドール孃の痲醉中の妄想である事を説明しましたが、先ではやつぱり主張するのです。都合の惡いのは痲醉劑を用ゐる必要が何故あつたとか、病氣は何だとか云ふのです。それを明瞭に私が云つて了へばいゝのですが、それを云はぬので、何處迄も私の方に弱點があるときめて居るんです。」

「それはお氣の毒です。もうしばらく祕密は話さずに居てやつて下さい。困つた事が出來ましたよ。」

「何です。どうしたのです。」

「ドール孃が今日こちらを出發して了つたのです。實は先生には申譯なかつたのですが、コエンスキーを東京へよび出すために、先生が恐喝に應ずるらしいから直に上京する樣にと電報を打つたのです。そしてコエンスキーの留守をねらつてドール孃をつれ出しに來たのです。殘念な事に、ドール孃はもう出發して了つたのです。誰かが迎ひに來たらしいのですが見當がつきません。」

「小原一派ではありませんか。」

「それも考へられるのです。今小原とこちらで逢ひました。どうも話の辻褄が合はぬ所があるので疑つては居ます。明日も亦コエンスキー一派があなたを訪ねて行きましたらば、恐縮ですが、ドール孃をつれて來れば二人だけで話をつけるからとか何とか云つて、樣子をさぐつて下さいませんか。」

「承知しました。」

「電話はこれできれて了つた。刺青の男は稍落着いて室へ歸つて來た。する事もないので彼は洋服を

ぬいで、戸棚の中にかけた。戸棚のなかは一層香水の香がして居た。彼はコンビネーゾンだけになつてベッドのなかにもぐり込んだが、どうもねつかれなかつた。彼はベッドからぬけ出して何の氣なしに洋服戸棚の下の曳出をあけた。大きな封筒がふくれ上つて何かゞあつた。彼はそれをとり出して電燈の下で見た。「コエンスキー様　ドール孃」とかいてある。彼はハッとしてそれを見つめた。

三

刺青の男はフランス女らしい封筒の字癖をなつかしく見つめて居た。

ドール孃が出發に際して何物かをコエンスキーに遺して此室を去つた事は確かである。と思へば此室こそ先刻迄ドール孃の居た室であつた。かゝとの高い靴音がまだ室の隅に遺してあるのではないか。ほのかに殘る香水の香。

刺青の男は今迄意識した事のない情……女としてのドール孃への……がわく〳〵と胸にわき立つて來るのを感じた。

彼は封筒の字に五六回接吻した。特にドールとかゝれた字に。……そしてやみ難き衝動にかられながら、ビリ〳〵と封を破つて了つた。明かに嫉妬であつた。ドール孃がコエンスキー宛に何物かを遺して行つた事に燃く様な嫉妬を感ぜざるを得なかつたのである。

彼は荒鷲が小雀を握る様な殘酷さをもつて封をビリ〳〵と破つて了つた。思ひがけなくも封の內からは、大きな寶石箱が表れた。彼は其箱が寶石箱である事さへ氣づかなかつた。まだ嫉妬の炎が燃えて居た。

彼は箱に乘せてあつた小さな鍵を箱の鍵穴に入れた。キーと音して箱はあいた。一枚の紙に一杯に字がかゝれてある。瞳をひらいて見つむれば、明かにフランス文字の走り書である。

又か。……と刺青の男は絕望の聲を發した。……又もドール孃はコエンスキーあてに文字をつらねて居るのだ。あの惡人にドール孃は身も心も任せて居たのか。彼は其紙片をわしづかみにした。ビリビリと破つて了ひかゝつた。その時チラと箱の底から紫の光りが長く尾を曳いた。紅い尾ものびた。おゝ。と刺青の男はうなつた。數多いダイヤが光つて居る、ルビーもある、アクロマリヤも、オパールも。

刺青の男はしばらく寶石の光に見とれて居た。心がいつともなく柔いで來た。手に握つて居た紙片をあけた。そして落着いて來た心で讀み出した。

「……東京、八月十四日、ドール。……急に此處を出發しなくてはならぬ事になりました。何事も詳細にお話する自由を持たぬのを殘念に思ひます。先日來あなたが私に示された御好意に對し、厚く御禮を申しあげると同時に、御好意を裏ぎる様な行動をします事をお詫び致します。私は再びあなたに

お目にかゝる事がありますまい。先日戴きました寶石は再びあなたのお手に返るのが當然と思ひます。尙ほ私があなたの祕書となるのを條件として戴きましたお金は、近く何等かの方法であなたのお手に返るのでありませう。さらばあなたの御幸福をいのりつゝ……」

刺青の男は讀み終へてしばらく呆然として寶石を見つめて居た。

と急に彼は自から驚いた。さてはドール孃はコエンスキーの手で姿をかくしたのではなかつたのだ……彼はドタンと椅子に腰を下して了つた。

誰だ、誰がドール孃をつれ去つたのだ。……

刺青の男は狼狽の極、室の内をあちこちとあるき出した。誰だ。何處へ姿をかくしたのだ。何の必要があつたのだ。……小原が一瞬間刺青の男に現れた。いや小原ではない。小林でも當然ない。森ドクトル？ そんな事はない。

誰なのだ。どうしたのだ。……

刺青の男の腋の下から冷汗が流れた。何と云ふ油斷を俺はして居たのだらう。コエンスキーでもない。小原でもない。小林、森でもない。それ以外の人は一體誰なのだ。

いくら考へても一向に見當がつかなかつた。茫然として彼は立つて居た。……惜しい、と思はれたやつぱり男らしく愛するものを捕へて置けばよかつたのだ．だが俺がいくら彼女を愛しても、彼女は

小林を愛して居たのだ。俺は女を我物としてそれで滿足して居る程の暴君にはなれなかつたのだ。愛されたかつた。愛して愛されたかつた。

が今になつてはそれがどうなるのだ。俺は暴君であつてよかつたのだ。男が愛する女を占領して何が惡いのだ。それが何の罪なのだ見ろ。鷲が出て小雀をうばひ去つて了つたではないか。

彼は頭の毛をむしつた。うゝ、まだ絶望ではない、勇氣をもつて小雀を鷲の手からとり返せばいゝのだ。よし、きつととり返してやる。彼は眼を見張つた。そして寶石箱の蓋をして鍵をかけて了つた。

紙片や封はビリ／＼に細かく破つて窓をあけて捨てゝ了つた。

此寶石は盜人などに返すに及ばない。小雀をさがし求めて又俺の手から渡せばいゝのだ。

——今から東京へ引き返すか。——

彼は呼鈴に手をのばした。其の時！ コツ／＼とドアが打たれた。

「ドール孃！」

其聲は鈍重さをもつコエンスキーの聲であつた。刺青の男は落着いて寶石箱をポケットに入れてドアを見つめて立つた。

四

「ドール孃、ドール孃！」

聲と共にドアが此度は相當に強く打たれた。刺青の男はキッとドアを見つめて居たが、其時いかにも落著いた態度でドアの鍵穴に鍵を挿し入れた。

「おあけになるには及びません。ドール孃。」

ドアの外の聲はもう落著いて居た刺青の男は一種の痛快さを感じながら、何の答もせずにドアを押した。

「あッ？」

ドアを押して現れた姿を見て、コエンスキーは叫聲を發した。

「あッ、どうしたのだ。」

刺青の男はわざとらしく落着き拂つて答へた。

「ドール孃は居ません。」

「居ない？ かくさなくてもいゝのだ。ベットの内に居ても差支ない。」

コエンスキーはドール孃がベットの内に居るものときめて云つた。

「いや。居らない。少くとも此中禪寺湖畔には居らない。」

「中禪寺湖畔？ それで何處に居るのだ。」

「それは知らない。何處に居るかを知るのは恐らく二人だけだらう。」

「二人？ ふん、それはお前とドール孃か。」

「いや、さうでない。ドール孃と、彼女を誘ひ出した未知の男だ。」

「一體どうしたのだ。話してくれ。」

「俺は全く知らないのだ。偶然俺は此ホテルへ來て、ドール孃の旣に居らぬのを知つたのだ。」

「偶然だと？ 偶然何のために此處へ來たのだ。」

「偶然は偶然だ。俺は此ホテルへ來て、初めてドール孃が此ホテルを今日の午後去つたのを知つたのだ。そして又それも偶然だが、此室に通されたゞけだ。」

「おい、坂上。お前は俺に電報を打つたらう。そして俺が上京するのを待たないで、何の必要があつて此處へ來たのだ。」

刺青の男はかう問ひつめられて初めて自分の今迄の態度が矛盾だらけであるのに氣がついた。自分は寶石を盜むのにばかり氣をとられて居たのだと思つた。

「別に何の必要もなかつたのだ。只ドール孃にも一度逢つて森ドクトルの件を詳しくきゝたかつたゞ

けだ。」
「さうか。まアそれならば、それでいゝ。」
「森はどうだつた。」
刺青の男はやつと血路をひらいた様に云つた。
「森の件などはどうでもいゝのだもう一週後にはドール嬢を活動させなくてはならぬ必要にせまられて來たのだ。ドール嬢はどうしたのだ。君は全く知らないのか。」
「全然知らないのだ。ホテルのケースできいてもはつきりは分らないのだ。僕の云ふ事が疑はしいならば、ケースへ行つてきいて來てくれ。」
「いや、そんな事はきくには及ばないのだ。何か書殘したものはないのか。」
コエンスキーはスタ〳〵と室の中に入つて來て、デスクの抽斗や衣裳戸棚などをあけて見た。刺青の男は重いポケットを稍氣にしながらも、わざと落著き拂つて居た。
「コエンスキー君、君は全くドール嬢の行方を知らないのか。」
「何でそんな事をきくのだ。君こそ知らないのか。」
「君の知らぬ通り俺も知らない。」
「實際か。」

「君こそ實際を云つて居るのか。」
二人はしばらく顔を見合せて居た。刺青の男は矢張りコエンスキーを疑つて居た。相當な惡人であるから、誰か人を廻してドール嬢をかくしたのではないか、と思つた。ドール嬢を俺が知つて居るのを眞坂彼は知る筈はない。だが、今もうつかりドール嬢云々を云ひ過ぎしたかも知れない。
コエンスキーは矢張り坂上を疑つて居た。坂上もなか〳〵のしたゝか者である。どう云ふ策を用るて居るかも知れない。
「とにかくドール嬢が姿をかくした事は都合が惡い。」
と刺青の男は獨語する様に云つた。
「さうだ。實に困る。」
とコエンスキーも云つた。二人は互に心をさぐり合ふ様に云ひ合つた。
「とにかく俺はケースへ行つてきいて來るぞ。」
とコエンスキーは廊下に出て行つた。刺青の男は、實際彼はドール嬢をかくしたのではないとも思へぬではなかつたが、矢張り油斷をしてはならぬと思つた。ふとポケットに手先がふれた、かたい寶石箱が重くポケットをふくらせて居た。
これを見出されてはならぬ——と思つて刺青の男は室の中を見廻した。夏帽が目についた、それの

内に彼はあたふたと寶石箱を入れて、そのまゝ帽子かけにかけて後やつと安心した。

「やつぱり誰かゞ誘ひ出して來たのだ。」

　コエンスキーはケースから歸つて來た。

五

　コエンスキーはケースから歸つて來て、かなり悲觀して居た。

「坂上君、全く君は知らないのか。」

刺青の男はコエンスキーの樣子で、彼は全くドール孃の失踪に無關係であるのを信じて來た。

「全く俺は知らないのだ。俺は恐らく君が彼女をかくしたのだと思つて居たのだ。」

「弱つたなア。」

　コエンスキーは腕を組んで考へ出した。

「然し君、どうしてそれ程ドール孃を必要とするのだ。強ひてドール孃でなくても、君の仕事は出來るだらう。」

「勿論それはさうなのだが、あれ程生れつき貴族らしい女はなかなかないものだ。それに又もう日がないのだから、又新しく人を捜すとなると大變なのだ。」

或はさうかも知れない。然し今更仕方ないだらう。君が是非と云ふならば、俺がドール孃位の女なら捜し出してやらう。」

「まァさうでもするしかあるまい。だが一層困るのは、彼女に大分寶石を呉れて置いたのだ。」

刺青の男は不安と痛快さを感じながらも、尙平氣を裝つてコエンスキーを見つめながら云つた。

「どうして又そんなものをやつたのだ。」

「それは餌なのだ。魚が大きいので餌も上等だつたのだ。フランスの貴族を釣るには、寶石に限ると云ふ事は諺にもなつて居る程だからな。」

「さうか。然し今更仕方なからう。呉れた以上は彼女の所有物だからな。」

「ところが、俺から云へば、決して寶石の所有權は彼女に移つて居はしないのだ。二三箇月後には完全に俺に歸る筈のものだから。」

「さうか。それは悲しむべき事だ。」

かう答へながら刺青の男は、先程發見した寶石を心の内でねぶみして見た。少くとも一萬圓は越えるものであつた。

「それでコエンスキー君、どうするか。彼女の行方を搜すか。」

「どうしても搜さなくてはならない。確に誰かゞあの寶石に目をつけたのだ。其方針で搜せばいつか

は見出せると思ふ。だが困る事には君も知つて居る通りの事情で、盗難屆を出す譯にもならないのだ。」

「と云ふのは？」

「だからさ。俺達の名で盗難屆を出せば、日本の警察も近來は、外國人でも一向遠慮せずにやり出したので、こちらの身が危險になるかも知れないのだ。」

「成程それもある。どうだ一つ俺が犧牲になつて盗難屆を出さうか。」

刺青の男はかう云ひながら、ドール孃を搜し出すには一種の方法であるのを思つたのである。

「駄目だらう。君だつて矢張り危險だらう。」

コエンスキーがかう云つた時、刺青の男は實際自分が危險であるのを思つた。其寶石は現在自分がかくして居るのであつた。

「まアそれもさうだ。がとにかく俺も極力ドール孃の行方をさがす事にしやう。意外の事が突發したものだな。」

二人は默念として額をテーブルの上に並べて考へ出した。

「もう遲いだらう。一晩眠りながら善後策を工風してはどうだ。」

「さうしやうか。」

二人はやつと立ち上つた。コエンスキーはとぼ〳〵と年老た足を運かして室を出て行つた刺青の男はその後姿を見送つて後、ドアに鍵をかけて、鍵穴からのぞかれぬ樣に特に鍵を鍵穴にさしたまゝ、靜かに帽子かけに近づいた。

帽子の内には重たい寶石箱が入つて居た。彼はそれを抱きながらベットに近づいて、洋服をぬぎ捨てゝ、コンビネーゾンになつてベットとの内にもぐり込んだ。

どうしても眠れなかつた寶石は自分には何の用もないものであつた。ドール孃は何とかして搜し出して之を渡さなくてはならない今はもうドール孃に對して遠慮などすべき時でない。あらゆる方法を以て、ドール孃を自分の手に奪ひ返さなくてはならない時である。

彼女が誰を愛して居ようと、そんな事は問題でない。自分は既に前からドール孃を愛して居たのだ自分の過去がどうあらうと、自分は彼女を手中に收めなくてはならない。

彼は男らしく決心した。かう決心すると今迄の自分が馬鹿らしくなつて來た。何故自分はもつと早く此決心をつけなかつたのであつたらうか。自分さへ早く決心すれば、ドール孃は惡人達に誘惑される事もなく、又今度の樣な事もなかつたのである。

彼は悔恨の涙を流しながらも、これからは決して自分を故意に卑下する樣な心は起すまい。堂々と自己を主張して行かう。そして自分の力で彼女を捕へ、自分の力によつて彼女の將來の幸福を保證し

てやらう。

彼はいつの間にか眠に落ちた。

六

刺青の男に淺い眠の夜が明けた。彼は朝霧に包まれた窓外をのぞいて見て、もう山中に秋が訪れて來たのを感じた。霧足の底の地面をふと見れば、秋草の花が淋しく咲いて居た。

――ドール孃！　マルグリツトよ、お前は何處に姿をかくして了つたのだ。お前は一體誰の懐に身を任せて了つたのだ。日本人なのか、それとも他國人なのか。日本人と云ふものは、お前の思ふ様な心の人ばかりではないのだ。恐ろしい心の人の方が多いのをお前は知らないのだらう。お前は森ドクトルを疑つて居る。そして或は沁々日本人を恐しい人種と思つて了つたか。

そして他國人に身を任せたのか。それとも表面だけ親切な日本人の一人にだまされて了つたのか。

マルグリツト、お前はそれとも他國人に身を任せたのか、日本に居る他國人は皆怪しい人々なのをお前は知らないのだらう。お前は一時の隱れ家として安心して居たコエンスキーなどは、實に世界を股にかけてあるく强盜團の首領なのだ。

お前は日本へ來て以來、女性として堪へ難い程の苦難に堪へて來たのだ。もうお前の心も疲れて了つたらう。そして一時の休息所をひたすらに求めて居たのであつたらう。その心の隙につけ入つた他國人がお前を誘惑し去つたのか。

マルグリツトよ。俺は今になつてはつきり云ふ……それはもう遲すぎるかも知れないが……。俺はお前を愛して居るのだ、何の野心もなく何の惡心もなく、たゞ一筋にお前を愛して居るのだ。俺はもう三月も前からお前を愛して居る。今迄一度もなかつた程に俺はお前を愛して居たのだ。お前はどう思ふか知れない。が少くとも俺程お前を眞劍に愛するものは、お前の一生には決してないのだ。俺はお前をそれ程愛して居たが、お前は俺を愛してくれなかつた。俺を愛する暇もない程お前は小林を愛して居たのだ。俺はお前が小林の手に歸るのをどれ程祈つて居たか知れない。そしてそのために可成り心をくだいて居たのだ。それと云ふのも俺はお前を愛しながら、お前の幸福ばかりを祈つて、自分の幸福などは考へる暇がなかつたのだ。

然し今日からは俺はお前を徹底的に愛するのだ。お前が小林を愛して居ても、それは俺の係はり知らぬ事だ。俺は强い俺の愛でお前を愛し續けるのだ。

マルグリツト、俺は俺の命にかけてお前を愛する。俺は必ずお前を捕へる。そして俺はお前を得る事によつて男となるのだ。それがお前のためになる事を俺は確信して居る。――

刺青の男は元氣よく洗面器に向つた。そして冷やかな秋の水で髯を剃つた。全身に男性の力がみな

ぎつて來た。彼は食堂に出るべくドアをあけた。

「お早う。」

出合頭にコエンスキーがドアの外に立つて居た。

「お早う。」

「おい今手紙がドール孃から來たのだ。」

「え？」

刺青の男は自分の耳を疑ひながら心を緊張させた。

「ドール孃はかう書いて居るのだ……突然ある日本人と共に此湖畔を去らなくてならなくなりました。それが私の將來の幸福を最も確實に保證する事であるのを信じましたので、無斷出發しました。理由がありまして當分私のアドレスをお知らせ出來ません。……と云ふのだ。それで君手紙の終にかいてあるのだが、……先日戴いた寶石は箱に入れたまゝ、今迄の室に遺して來ました。恐らく出發後掃除をしたものが保管して、あなたにお渡しするでありませう……と、かう書いてあるのだ。で君、一つ室の中を調べスできいて見たが、まだ室はよく調べない中に別な客を通したと云ふのだ。今ケーさせてくれないか。」

刺青の男はコエンスキーの言葉をきゝながら既に決心して居た。

「あゝ、それは確に俺の手にある。」

「うん、さうか、それはよかつた。」

刺青の男は一層眞顏になつて云つた。

「コエンスキー君、俺は本氣で君に話すのだ。ドール孃を誘ひ出したのは俺には無關係の人だ。それを先づ信じて呉れ。コエンスキー君、俺はドール孃を本氣で愛して居る。俺は今日から男らしく彼女を搜し出して我物とするのだ。其態度を是認してくれ。終に俺は君に詫びなくてはならない。俺は昨夜此の室でドール孃の寶石箱を見出したのだ。然もその箱に入れてあつた封筒には明かに君の名が書いてあつたのだ。が俺はその內容を知りたかつたので封を破つたのだ。そして寶石であるのを知つた。且又箱の內には君宛の手紙があつた。それは寶石を返すと云ふだけであつた。然し俺は考へた、此寶石は君に返却する必要がない。ドール孃に與へていゝと思つた。それで俺はそれを盜んで居るのだ。」

刺青の男はかくす所なく云つた、コエンスキーは初めて驚いて居たが、段々と眞顏になつて刺青の男の顏を見つめた。

七

コエンスキーは刺青の男の眞面目な態度に心をうたれて了つた。

「さうか、さうだつたのか。寶石などは君の知つて居る通り、支拂はずして俺の所有に歸したものだ君が欲しいと思ふならば、それは君の所有物として置き給へ。又ドール孃とても君の思ふ通りに扱ひ給へ。俺は何も主張しない。唯一つ願ひたいのは、ドール孃が居なくなつては、今度の仕事がうまく行かないかと思ふのだ。何とかしてドール孃をさがし出して、今度だけでも君の力で、仕事の手助けをさせてくれないか。もしそれが出來ないならば、誰か外に人を至急にさがしてくれ給へ。」

刺青の男は默つてコエンスキーの言葉をきいて居た。惡心のみと思つて居たコエンスキーにも友情はあつた。寶石は氣前よく呉れると云ふのであつた。

「コエンスキー君、有難う、我儘だが寶石は俺にくれ、俺はこれをドール孃に渡すのだ。勿論ドール孃は寶石を盜んで行きはしなかつたのだ。ちやんと出發に際して君に返して行つたのだ。其心が美しく思へる。フランスの女だ。寶石に對する憧憬はすべてを超越して居るフランス女なのだ。それがかうして寶石を君に返して出發したのだ。フランス女にとつて寶石よりも尙心をひくものがあるだらうか。ない、斷じてない。戀も彼女等には寶石に勝てないのだ。それで俺は心配なのだ。何が彼女を誘惑したのであらう。何が寶石よりも强烈に彼女を刺戟したのであらう。俺はそれが心配でならないのだ。

今の君の言葉で俺は一つ考へついた事がある。或は彼女は惡を避けたのではなからうか。惡を避け

るためにすべてを捨て、身をかくしたのではなからうか。」

「惡とは？」

コエンスキーは刺青の男の言葉を理解出來なかつた。

「失敬な言葉を許して呉れ。惡とは君等の行動をさして居るのだ。」

二人はヂッと額を見合せたまゝ默つて居た。

「コエンスキー君、俺は決して君等の行動を責めはしないのだ。唯ドール孃が身をかくした理由を思ふ時、惡から遠ざかりたいと云ふ情が、彼女に寶石迄も捨てさせたのではないかと思ふのだ。唯それだけだ。決して俺は今更らしく善人ぶるのではない。俺の過去は惡そのものだつたのだ。君達を責める資格などは毛頭ないのだ。

俺は淋しくなつて來た。ドール孃に逢つて以來、俺はどうしたのか淋しくて仕方ないのだ。恐らく俺も惡人としてドール孃から逃げられるだらう。それを思ふと一層淋しいのだ。」

コエンスキーは刺青の男の眼が曇つて居るのを見た。

「坂上、お前は弱くなつたな。どうだ、そんな氣の弱い事を云はずに、もつと男らしく元氣を出してはどうだ。そしてドール孃をさがし出すのだ。男だ。男らしく愛するものを握らなくては駄目だ。」

「有難う。おれはやるだけはやつて見る。そして彼女をさがし求める。もしそれが不成功に終るなら

ば、俺は再び船にのるのだ。そして世界の港々を廻つてあるくのだ君達の樣にすべての惡を一生の仕事とするのだ。」

「あゝ、俺はお前が又舊のお前に歸るのを決して希望しては居ないドール孃によつてお前が淨化されるのを心から祈つて居るのだ。

だが、坂上。君は俺達の心を誤解してくれるな。」

「分つてるよ。君等の心はよく知つて居る。君達は富の平均を考へて居るのをよく知つて居る。此日本にも君等の理想が實現されて居るのを知つて居る。先年の大震災の時、無名の米國團が救護のために大金をなげ出したのを知つて居る。俺はある時、君等がやつたのだと言ふ事をすぐに知つた。寶石……それは富めるものがその富を最も盜まれ易い形にして所有するものだ。それを盜んで國境を越えて運ぶ。そして其國の富めるものに金と交換を強ひて、そして富の平均を計る、それがＰＰＲ團の理想であるのを、俺は知つて居るのだ。」

「分つて居てくれゝばそれでいゝのだ。法律は俺達を罰する力がある。俺達の行動は法律が罰するだらう。然し俺達の心は決して罰する事は出來ないだらう。俺はそれを思つて生きて居るのだ。もうドール孃の手助けを希望する氣はなくなつた。」又いつか逢ふだらう。或は俺達が世界の何れかの國で法に問はれる時が來るかも知れない。もしさう云ふ事があつて、夫が君の耳に入つたらば、君だけは俺達のために辯明してくれるだらう。それで俺達は滿足しよう。では君とドール孃とに幸福の日の來るのを祈りつゝ俺は別れて行く。」

コエンスキーは老いた額の汗を拭ひながら室を出んとした。

「コエンスキー君。一寸待つてくれ。」

刺青の男はベッドに近づいて、蒲團の間から寶石箱を出した。

八

「コエンスキー君！」

刺青の男は寶石箱を持つてコエンスキーに近づいた。

「僕は思ひ違ひをした樣だ。ドール孃の置いて行つたのは此寶石だ。お返しするのが本當だと思ひついた。返さう、うけとつてくれ給へ。」

コエンスキーは沈痛な顏をして寶石箱を見つめた。

「坂上君、どうしたのだ。どうして返すのだ。」

「俺が思ひ違ひをして居たのだ。此寶石も亦君達の理想の實現に役立つのだ。それを俺の情のために貰つては申譯ない。それで返すのだ。」

「さうか。それはどちらでもいゝのだ。君が返すならば貰つて置かう。」

コエンスキーはそれを請取つた。

「やア有難う。ではお別れだ。」

「あゝ、又縁があつたらば逢ふだらう……」

刺青の男はふと思ひ出す事がある様に顔をあげた。

「コエンスキー、君まだ森ドクトルを苦しめる積なのか。」

「さアどうしやうか。一體森と云ふ醫者は金持なのか。」

「それは知らない、だが森ドクトルは罪がないのだよ。俺は森ドクトルを前から知つて居たのだ。あれはドール孃の思ひ違ひだと思ふのだ。今だからみんな君に話さう、ドール孃はからだに刺青を持つて居るのだ。それを抹殺するために森ドクトルに頼んだのだ。その刺青はドール孃の内もゝにあるのだ。それを口で云ふ勇氣がないので、ドール孃は森ドクトルに痲睡劑をかけて刺青を捜して呉れと頼んだのだ。それで森ドクトルは痲睡劑をかけたのだ。痲睡中にドール孃は或る妄想を起したのだ。それは森ドクトルの言ふ所だが、不幸にも治療室にはドール孃とドクトルと二人しか居なかつたのだ。それで誰も證人がない。そのために森ドクトルは辯明の途がないのだ。俺は森ドクトルは決して非難される樣な人格の男でない事を信じて居る。どうだらう、俺の言葉を信じて呉れないか。」

「うん、君がさう云ふならば、強ひて俺はドクトルをせめる積はないのだ。只ドール孃のために心配したに過ぎないのだから。」

「だから俺は一層君にたのむのだ、森ドクトルがドール孃を凌辱した事を事實と思ふ事は、俺としては到底堪へられないのだ。どうか俺の心中を察してくれ。」

「分つた。よく分つた。もう再び森ドクトルをせめるのはやめよう、いづれにしても、俺はもう年をとり過ぎたのだ。元氣もぬけて來た。然しもう一息だと思つて努力しやう。では此箱はもらつて行く。坂上君、金はあるか。ドール孃を滿足させるだけ金があるか。」

「金か。金はもう餘りもたないのだ。だが君からは貰ひたくないのだ。男らしく何とかして彼女を滿足させるだけ金を造るのだ。それが金を造る最終となるだらう。」

「うん、それがいゝ。では俺達はもう一二週で日本を出發するだらう。世界の何處かで又逢ふのを待たう。さよなら。」

「では、さよなら。」

二人はかたく手を握り合つた。コエンスキーの眼には涙が光つて居た。坂上の頬にも涙が流れて居た。

刺青の男は淋しく出て行くコエンスキーを見送つてドアを閉ぢてベツトの上に仰向きに倒れた。

彼も年をとつた。世界をまたにかけて歩き廻る強盗團の首領も年をとつた。物の哀れは戀をするか年をとる時に感ぜらるゝものなのだ。俺も氣が弱くなつた。今迄は左程にも思はなかつたが、ドール孃の行方が全く知れなくなつた時初めて自分をはつきりと意識した。そしてドール孃が戀しくなつて來た。かうして居てはならない。一日も一刻も早くドール孃をさがし出さなくてはならない。

疲勞しきつた坂上はいつともなく眠つて了つた。ふと目をさますと、もう太陽は午後の日足を斜に窓外の秋草の野に降らして居た。

彼はドアをあけてケースへ出て行つた。

「コエンスキーさんはもうたちましたか。」

ケースの男は止宿人名簿をくつて居た。

「コエンスキーさん。えゝ今日午前にお立ちになりました。」

「仲間の人は？」

「みなさんもさつきお立ちになりました。」

刺青の男は自分一人淋しい山中のホテルに殘されたのを思つた。

「私も歸ります。自動車をよんで下さい。」

刺青の男は勘定をすませて室に歸つて來た。

――すぐに東京へ行かう。そしてドール孃の行方を捜さう。――

彼は小さなスーツケースに持物をつめ込んで自動車の來るのを待つて居た。

ドアが打たれた。

「はい。」

刺青の男がかう返事をした時、ドアがギーとあけられて、思ひがけなくも三人の警官が現れた。

九

ドアから室に入つて來る警官の姿を見て、刺青の男は驚いた。ホテルの支配人が先づ話しかけた。

「御迷惑樣ですが、警察の方が何かおきゝしたい事があるとおつしやいます。」

其言葉をきいた時、坂上はもう落着いて居た。

「あゝ、さうですか、どうぞ。」

支配人は警官に云つた。

「此方が坂上さんです。どうか。」

支配人は一禮して室を出て行つた。警官の一人は坂上の顏を見つめて云つた。

「あなたが坂上一郎さんですか。」

「さうです。」
「突然で失禮ですが、あなたは今朝迄此ホテルに止宿して居たコエンスキーと云ふアメリカ人を御存じですか。」
「えゝ知つて居ます。」
「どうして知つておいでになるのですか。」
刺青の男はかう答へながら事件はコエンスキー一派の事であるのを知つた。
「外國で一度あつた事がありますので。」
「はゝ、外國で。で今度はいつからお逢ひになつたのですか。」
「ほんの五六日前からです。」
「さうですか。あなたの御商賣は？」
「無職です。」
「無職？」
「えゝ、今は何もして居らないのです。」
「さうですか。コエンキスーと云ふ人は何處へ行つたのか御存じですか。」
「分りません。多分東京へ歸つたのかと思ひます。」

「その人は何商賣をやつて居るのですか。」
「よくは知りませんが。貿易商だらうと思ひます。」
「貿易商？　そして主としてどう云ふ方面の。」
「それはよく知りません。」
「さうですか。」
警官は手帳を出して何かかきつけて居た。刺青の男はコエンスキー一派が警密の注目する所となつて居るのを思つて、それを彼に知らせてやりたくなつた。
「どうかしたのですか、コエンスキーが。」
「たいした事ではないのです。婦人を誘ひ出したらしいのです。」
「婦人とは？」
「フランスの婦人です。」
「フランス？　……ドールと云ふ人ではありませんか。」
「さうです。ドールと云ふ貴族の婦人です。あなたはその婦人を御存じですか。」
「えゝ、一寸知つて居ます。」
「今何處に居るかを？」

「それは分りません。私も捜して居るのです。」

「あゝ、あなたも。で實際コエンスキーはその婦人をつれて居ましたか。」

「えゝ、昨日迄その婦人は此ホテルに居たのです。昨日急に姿をかくしたのです。」

「ではコエンスキーが何處かへかくしたのです。」

「さうではないのです。誰か分らないのですが、ドール孃をつれ出したものがあつたのです。コエンスキーとは全く無關係です。」

「ふん。」

警官は互に顔を見合せて眼で物を云ひあつて居た。

「一體誰から捜索願ひが出たのですか。」

坂上はかうきいて見た。

「フランスの大使館からなのです。學習院の先生ださうですね、其婦人は。」

「さうです。とにかく昨日此ホテルを立つた事はたしかです。又コエンスキーとは無關係なのも確です。」

「さうですか。で、あなたはまだ此ホテルに御滯在ですか。」

「さア、どうしやうかと今考へて居る所です。私もそのドール孃をこれからさがす積なのです。」

「あなたとドール孃との關係は？」

「別に深い關係はないのですが、知り合ひの仲なので心配して居ます。」

「さうですか。まア此中禪寺に居らぬときまれば、それを警視廳に報告すればいゝのだから。……いや失禮しました。參考のために伺つて置きたいのですが、あなたの御住所は？」

「私は家がないのです。」

「え？」

警官は稍不審らしく坂上を見た。警官等は小聲で何か話しあつたが、云ひ惡さうに口をきつた。

「失禮ですが、一寸出張所迄おいでを願へますまいか。」

「えゝ、參りませう。」

坂上は稍好奇心も起つて來て承知した。警官の後について刺靑の男はテク／＼と廊下をあるいてホテルの玄關に出た。ケースの人達は警官に同行されて出て行く坂上を見て眉をひそめながら、さゝやきあつて居た。

「御迷惑でした。」

一〇

警部補は刺青の男に椅子をすゝめながら云つた。

「事件の詳細はこちらでは分りませんが、警視廳は大分神經質になつて居る樣子です。フランスの大使館から捜査願が出て居るのださうです。依頼をうけましたので、出來るだけ詳しく調べて返事をしてやりたいのです。あなたは前からそのフランス貴族を御存じなのですか。」

「さうです。二三箇月前から知つて居るのです。」

「どう云ふ機會にお知合におなりでしたか。」

警部補の言葉はいつともなく訊問の調子を帶びて來た。

「私が治療をうけて居た東京の醫者の家にその婦人が寄寓して居ましたので知合つたのです。」

「で、コエンスキーと云ふアメリカ人がドール孃を誘拐した事は分つて居ますが。……」

「それは違つて居ませう。コエンスキーは決してドール孃は誘拐しないのです。」

刺青の男はコエンスキーが警察側から疑はれて居るのを氣の毒だと思つた。特にコエンスキーが疑はれるならば。彼等の行動が此機會に表面に出ないとも限らぬのを思つて、出來るだけ彼等に有利の言葉を惜しんではならぬと思つたのである。

「然しコエンスキーが丸の內ホテルから此中禪寺へその婦人をかくしたのは、警視廳では知つて居るのですよ。」

警部補は稍皮肉に云つた。

「それは事實ですが、コエンスキーはドール孃を祕書役に雇つたのでせう。正々堂々と雇つたのです、それよりも昨日急にドール孃を此處から誘拐したものがあつたのをお取調べになる方がいゝと思ひますが。」

「まアそれは私達の考へる通りにやります。で、あなたとコエンスキーとはどう云ふ關係なのですか。」

「もう七八年も前ですが、歐洲で逢つて知合になつたのです。それが偶然今度逢つて舊交を溫めたと云ふ譯です。」

「さうですか。それでコエンスキーと云ふ人は東京へ行つたのですな。」

「多分さうだらうと思ひます。」

「いや。よく分りました。失禮ですがあなたの住所は？」

「うちなどありません。」

「うちがない？」

「えゝ、流浪の子にはうちはないのです。」

警部補は刺青の男を見つめて、疑ひの眼を見はつた。

「で、いつ迄此處に御滯在ですか。」

「まだそれを考へて居ません。」

「有難う。ではおひきとり下さい。」

刺青の男は警察が彼を疑つて居るのを知つた。自分は疑はれても何の心配もないのであるから安心であるが、コエンスキーの身に危險がせまつて居るのを思つた。

彼は警察を出てから湖畔を漫歩して居たが、どうもコエンスキーの身が不安でならなかつた。彼は郵便局へ行つた、歐文の電報用紙を貰つて彼は文句を考へて居た。英語は危險であると思つた。彼は佛語で電報をかいた。

「危險、すみやかに身をかくせ。」

彼は佛文の綴を一字々々局員に話して、やつと安心して局を出た丸ノ內ホテル內としてコエンスキーにうつた電報である。

彼が局を出ると入り違ひにコソコソと和服の男が局に入つて行つた。そして刺青の男の電報の文句を手帳にかきつけて居た。

「警察ならば仕方ないですよ。本當は見せられないのだが。」

「面白い事件なのだ。いづれ分るよ。」

局員と和服の男とはこんな會話をして居た。

刺青の男はホテルへ歸つて來たそして夕暮になつたらば出發しやうと思ひながら、ベッドに倒れて眠つて了つた。

彼がドアを打つ音に眼をさましたのは夕暮近かつた。ホテルの支配人が先づ入つた來た。それに續いて巡査が二人來た。

「あなたが坂上さんですか。一寸署迄同行して下さい。」

刺青の男は半醒の心に反抗心がわき立つて來た。

「何の必要があるのです。今朝行つて來たばかりだ。」

「とにかく御同行を願ひます。」

「いやだ。俺は今出發するのだ。」

巡査の一人は何も云はずに室を出て了つた。殘る一人は默つて刺青の男を見つめて居た。支配人は氣まづくなつて出て行つた。

「君、これは俺の室だ、出てくれ給へ。」

「出られません。署長から命令がある迄はあなたを警戒しなくてはならぬのです。」

「勝手にし給へ。俺は罪人ぢやない。」

刺青の男はサッサと洋服をきて呼鈴を押した。出て來たボーイに彼は勘定をたのんだ。巡査は默つてドァの側に立つて居た。

ドャ／＼と廊下に音がして警部補が今度は嚴格な顏をして入つて來た。

二

再び警部補派出所の玄關に巡査と共に現れた刺青の男は、何か事件が不都合に發展しつゝあるのを豫感して居た。

警部補は案外にもおだやかな調子で彼を迎へた。

「度々御迷惑です。も一度伺ひたい事が出來ましたので御足勞をかけました。」

「いや、どう致しましてお役に立ちますなら何回でも參ります。」

「それで失禮な申分ですが、あなたは本當にドールと云ふフランス貴族の今の居所はお知りになりないのですか。」

刺青の男は警部補の問が相變らず同一の範圍を出でぬのを知つて稍腹が立つて來た。

「全く知らないのです。」

警部補は輕い笑を顏に出しながら、机の抽斗から一葉の紙片を出した。

「これをお讀み下さい。」

と云つて警部補は刺青の男の顏に現る僅かの表情も見落すまいと、眼を見はつた。刺青の男は警部補のさし出す紙片を見た時、別に驚きもしなかつた。

「これは私がさつき東京へ出した電報です。」

刺青の男は案外平氣であつた。

「さうです、だからあなたはフランス貴族の住所を知つて居るのです。」

「どうしてゞす！」

刺青の男は口を尖らせて不服氣に云つた。

「かくしても駄目ですよ、今フランス語を讀める人に讀んでもらつたのです。」

刺青の男は一層不愉快になつて來た。

「それがどうしたと云ふのです。コエンスキーと云ふ男に……危險がせまつて來たから身をかく……せと電報を打つたのが、どうしたと云ふのです。」

「あなた自身の心に問うて見てはどうです。」

警部補は警察官らしく云つた。刺青の男は猛然として痛快な彼の本心に立ち歸つた。

「あなたはまだ私を疑つて居るんですか。考へても見るがいゝ。若し私やコエンスキーがフランス貴

族の行方を知つて居るならば、そしてそれを知られたくないのならば、こんな電報を打つ筈がないではありませんか。この電報はフランス貴族などゝは何の關係もない事です。」

警部補は一向腹を立てなかつた默つて刺青の男を見つめたまゝである。刺青の男は相手の煮えきらぬ態度に一層腹が立つた。

「フランス貴族のドール嬢は私の戀人なのだ。だからあなた方よりも私の方が餘計に心配して居るのだ。かう云つたらばもう分つたでせう。」

「いゝえ、まだ分らんです。此電報の文句の說明をきかなくてはまだ分らんのです。」

「そんなに疑ふならば話してあげませう。コエンスキーと云ふ男は强盜なのだ。」

「强盜？」

警部補は聞耳を立てた。

「さうだ。大强盜なのだ。」

「强盜ならばどうしたと云ふのです。」

「フランス貴族の事などから足がつくと氣の毒だと思つて知らせてやつたのです。」

「さうすると其强盜に身をかくせとあなたは電報をうつたですな。」

「さうです。」

刺青の男は臆する所なく云つた警部補はいつとなく興奮して來た。

「何故そんな電報をうつたのですあなたも同類ですか。」

「いや私は何の關係もない。」

「と云うてもかう云ふ電報をうつたではありませんか。」

「それは舊友の身を心配したからです。」

「とにかくあなたは罪人を逃がす樣に電報を出した點は承認しますな。」

「勿論？」

「では此まゝ拘束します。」

刺青の男は拘束と云ふ言葉をきくや破鐘の樣な聲を出した。

「馬鹿！　何の理由があつて拘束するのだ。俺に何の罪があるのだ。」

「强盜に關係がある。」

「ふん、强盜と云ふのは、俺が今敎へてやつたのだ。が然しコエンスキーが强盜であつても日本の官憲はどうする事も出來はしないのだ。もう少し考へてから物を云はなくてはならない。知らんならば敎へてやる。コエンスキーはアメリカの强盜なのだ。日本とは何の關係もないのだ。日本の官憲はアメリカからまだ何の依賴もうけて居ないのだ。それでも俺を拘束する理由があるのか。」

刺青の男は云つてきかせる樣に落着いて話した。

「分りました。まア今日は御自由におひきとり下さい。」

「さうでせうな。私はフランス貴族を一心に捜さなくてはならないのですから。」

刺青の男は何事もなかつた樣に署を出て、ホテルへ急いだ。

破綻

一

箱根塔之澤の旅舘に夜は更けて居た。ドール孃は思ひがけなくも日本著以來半年で。小林畫伯に逢つた喜悅にひたつて居た。

「……そんな危險の渦中に自分が陥つて居るとは全く知りませんでした。神が私を愛して居て下さつたのです。あなたにお目にかゝる機會を與へて下さつたのは。」

「そのアメリカ人も危險ですが、坂上と云ふ男も亦アメリカ人の同類なのです。森ドクトルなども同樣なのです。」

「さうでせうか。」

ドール孃は坂上が危險な人物であるとはどうしても思はれなかつた。

「坂上さんもさうでせうか。」

「勿論さうですよ。」

小林はかう云ひきつてドール孃を見つめた。ドール孃はまだ小林の云ふ事を信じなかつた。

小林はふと思ひ出した樣に云ひ出した。

「坂上は森ドクトルを惡人でないと云つて居るでせう。それだけで分るでせう。」

かう云つて後、小林は云はない方がいゝ事を云つて了つていやな氣分になつた。ドール孃は小林の顏色でそれを讀む事が出來た。

「あなた、森ドクトルの事は私の思ひ違ひです。」

ドール孃は小林とかうして逢つた以上かう云ふしかなかつた。

「それはお前が云ひ出した事だ。だからお前さへ取消せばそれですむ事だ。坂上などにきかなくてもいゝ事だ。」

小林の調子は叱る樣であつた。ドール孃は悲しくなつて來た。

「マルグリツト、お前はどうして森ドクトルに痲醉劑などかけてもらつたのだ。餘り油斷があり過ぎるではないか。」

小林はかうしてドール孃に逢つた後は、すべてを明瞭にして置く方がいゝと思つたので、思ひ切つていやな事と思ひながらきいた。

ドールは咄嗟には返事が出來なかつた。痲醉劑をかけてもらつたのは、自分の身にある刺青のためなのだ、その刺青の事は小林にはどうしても話す事が出來ないのである。

「マルゴ！」

小林は巴里時代を思ひ出して呼んで見た。

「マルゴ、巴里の頃の樣にみんな話しておくれ俺は過ぎた事を責めはしないのだ。どうして森に痲醉劑をかけてもらつたのだ……それよりもどう云ふ治療をうけたのだ。」

ドール孃はます〳〵悲しくなつて來た。やさしくきかれゝば尙更ら悲しくなつて來るばかりである。

「もうすこし待つて下さい。」

ドール孃はやつとこれだけ云つた。

「話すだけは話してくれ、もうお前と逢つて三日になる。そして二人で巴里へ歸る約束もしたのだらう。もう云つてくれ。何もかくさずに。」

ドール孃は悲しげに長い睫毛を動かして小林を一時見たが、又その眼を下げて了つた。

「マルゴ、さアみんな話しておくれ、そして明日は京都へ行くのだ。京都のアトリエでお前をモデルにして日本への置土產にするのだ。お前をモデルにしさへすれば、恐らくは俺の此秋の收入は十分に私達を巴里へ送つてくれるのだ。」

ドール孃は三年前に小林から頻にせめられたモデルと云ふ言葉をきいて、一層悲しくなつた。モデルにこそまだなれないのである。此身の刺青を抹殺するのも、モデルになりたいためであつた。小林の思ひのまゝになるために刺青を抹殺したかつたのである。それを刺青はまだそのまゝで計らずも小林に逢つて了つたのである。

ドール孃はしきりに淚が出て來た。小林はドール孃の淚を見ながら。いつの間に
まらなくなつて來た。

「もういゝよ。今夜でなくてもいゝ、いつでもお前がすべてを話したく
のだ。」

小林は泣いて居る女のえり頸を抱いた。

「もう泣かなくてもいゝ。一日も早く此日本を出發しよう。」

「どうか、さうして下さい。」

ドール孃はやつと云つて小林のひざに倒れた。二人だけの世

の隙から入つて來た。
突然電話のベルがなつた。二人はハッとして身をはなした。[illegible]
電話は小原からであつた。
……とにかく箱根あたりでは危險だから、もつと遠い所に行かな[illegible]が出來て居る。今坂上が訪ねて來た。あいつの話だから、嘘かも知れ[illegible]査願が出て居るさうだ。僕は全くドール孃の行方を知らぬと云つて置い[illegible]寺へ連れて行つたアメリカ人と云ふのは、アメリカの强盗團ださうだ。早く[illegible]
電話がきれた、小林はきいた電話をどこ迄ドール孃に話すべきかに迷つたが、[illegible]都へ向けて出發する決心だけはなした。

二

京都の郊外に棲む大友畫伯のアトリエに時ならぬ客人が飛び込んだのは、秋めく夕暮であつた。
「いづれ色々話すが、君より外にたよる所がなくなつて了つたのだ、これが時々話した人なのだ。」
小林はかう云つて大友にドール孃を紹介した。
「さうか。まア遊んで居給へ。僕は明日から山の寺へ行く筈なのだ、女中を殘して行くから、自分の

家と思つて居給へ。」
「何分賴む。十月には又巴里へ行く積なのだ。只金がないので困つて居る。」
「まだ日があるよ。一つ得戀の元氣で大作をかくさ。さうしてそれを賣りつければいゝ。」
「うん、その積なのだ。これをモデルにしてかくのだ。」
「それは申分ない。半製になれば賣口は僕もさがして來る。とにかく明日からやるさ。」
「あゝ。」
小林はドール孃が心配らしく一人默つて居るので、大友との會話をフランス語で話した、ドール孃は何とも答へなかつた。
「マルゴ、お前、きものゝまゝでいゝから一寸其處でポーズして見ないか。」
ドール孃は人形の樣にスッと立つた。そして室の隅に立つた。
「右手を一寸あげて、顏を右に。よし。」
ドール孃は淋しい姿で立つた。大友が小聲で云つた。
「いゝ線か出るな。今迄度々ポーズした事があるのか。」
「まだなのだ。」
「さうか。」

大友はかう答へたが、しばらく頭をかたむけて考へて居た。

「小林君、此婦人をモデルにした畫を僕は見た樣な氣がするがなア。」

「さうか。然しそんな筈ないよ。何處でだ。」

「日本だ。たしかに日本だ。然も最近だ。」

大友はしきりに考へ居る。ドールはまだボーズのまゝで居た。

「マルゴ、もういゝよ。」

ドール孃は靜かに動いた。それを見て居た大友はふと思ひあたつた樣に云つた。

「あゝ分つた。今京都へ來て居る日佛交驩展覽會だ。たしかに此婦人だと思ふ。年齡は少し若かつたかも知れないが。」

「さうか。だが此人ぢやなからう、僕は巴里で何回となくモデルになるのをたのんだが、どうしてもきかなかつたのだから。」

「とにかく明日行つて見給へ。東京では見なかつたのか。」

「あゝ、雜用ばかりあつたので見なかつた。雜用と云ふのは此女の件なのだ。」

「さうか。大分苦勞したのだらうが、まアさうして二人で俺をたよつて來る樣になれば、申分ない。」

「だが隨分心配なのだ。僕を訪ねて日本迄來たのだが、色々な危險な目にあつたらしい。現在とてもかなり危險がせまつて居るのだ。君何分僕の名を誰にも話さぬ樣にして呉れ給へ。」

「よし、默つて居る。……誰か君の戀人を追ひかけて居るのか。」

「さうではないのだ、アメリカの强盜團に一度買はれたのだ。それを盜んで來たのだから。……それに又フランスの大使館で心配して搜索願を出して居るのだ。」

「そいつはあぶないな。此處なら先づ大丈夫だらう。」

「さう思つてたよつて來たのだ。何分たのむ。」

「うん。それで今夜は俺の方で遠慮するぜ。どうせ明日山の寺へ行くのだから、俺は夕飯がてら町へ出て行く。今夜から城をあけ渡すのだ。」

「さうか。すまないな。いづれ君も巴里へ來るだらう。その時美人を世話するから。」

「あゝ。」

二人は心安く笑ひあつた。

飛入りの客に留守をたのんで大友はカンバスを手にさけて家を出た。

「遠慮なく女中を使つて呉れ給へ、年は若いが隨分間の拔けた女で、不便此上ないが、その代り君等二人の邪魔には決してならないよ。」

大友は暢氣な事を云つて出て行つた。宿屋ならぬ家に二人きりになつた小林とドール孃とはしばら

くぶりで落著いた心になつた。

「日本の紳士はどなたも心のいゝ人ばかりですね。」

ドール孃は大友の親切を喜んだ。

「損徳など全く考へて居ない友情は日本にしかないのだ。今迄日本でお前の逢つた日本人はみんな利益のためにお前に親切をつくした人達なのだ。」

「さうかも知れません。私は日本へ來て以來今日になつてやつと安心しました。」

二人はたのしく笑ひあつた。

三

アトリエに隣る寢室で相愛の二人は夜の更ける迄語り合つて居た。

小林は逢ふ日を待ちつゝ巴里迄も行く金策最中に計らずも、ドール孃に日本の國土で逢ふ事の出來たうれしさに、全く夢心地であつた。特に愛するマルゴが、自分を慕つて遙けくも海を渡つて來たのを知るに及んでは、其喜びはたたふるにものもなかつた。何の不平もなかつた。何の不安もなかつた。

ドール孃は小林に逢へたうれしさは、小林におとる筈はなかつたが、心に祕めた不安はともすれば頭をもたげて來た。今宵も巴里時代と同樣に、小林はモデルになる事を希望して居る。ドール孃とてもモデルになる事によつて愛する者の喜ぶのを思はぬではないが祕かにかくして居る刺靑のために、どうしても小林の希望に添ふ事は出來なく思はれた。一思ひに話して了つてさつぱりしたくも思はぬではなかつた。けれども刺靑の祕密を話したならば、恐らくはすべては破綻であらう。モデルとしての價値に變りのない肉體であつても、畫家として愛人にとつては彼女をモデルとしての價値は全く失はるであらう。

不安は絕望を呼んだ。一思ひに惜しくとも悲しくとも愛人の許を逃げるしかない、と迄ドール孃は思つたが、三年以來戀慕ひ海を越え異國の苦惱を堪へしのんで辛うじて逢つた愛人と、今にして別る事はどうしても出來なかつた。

小林はしきりにドール孃に戀の言葉をかけた。ドール孃は人形としては戀の言葉に醉ふ事が出來たが、一人の女性としてはどうしても戀の言葉を返せなかつた。

心を祕めた人形は愛人の胸に抱かれた。愛人は安らかに眠つた。ドール孃は秋蟲のなく音の降る窓に一人よつた。そしてはるかに生れた國を懷ひ起した。巴里ならばすべてを打明けて、愛人から罪を待つ事も出來るであらう。けれどもこの日本では……ゲイシヤもある。ムスメもある。云つてはならぬ、話してはならぬ。

——一思ひに今此處を逃げて、又も森ドクトルの治療をうけて來やうか。あゝその森ドクトルこそ自分の將來を滅茶苦茶にする虞のある人である。——

ドール孃は沁々と悲しかつた淋しかつた。

ドール孃に悲しい一夜はあけはなれた。京の郊外に霧が深かつた。

「もう九月！」

ドール孃は淋しく獨語した。雪のまだ降る頃から今日迄の事が後々と思ひ出されて來た。

「一思ひに國へ歸らうか。」

それには旅費すらもなかつた。折角コエンスキーからもらつた寶石……それは一生涯に二度と見る事さへもおぼつかないあの寶石も、戀のうれしさに中禪寺に殘して來て了つた。あれさへ手にあれば金に更へて巴里へも歸れたらうものを……

「ガタ」と音がして忠實な日本の女中が勝手で起きたらしい。

ドール孃は靜かに、物音のせぬ樣にアトリエに入つた。其處には畫きがけの何枚かの畫が雜然としてあつた。

——此室の此のあたりにポーズしてやる事が出來たならば——

悲は改めて深くなつた。自分一人ならばいゝ、見るものは朝霧だけだ。ドール孃はソツときものをぬぎ捨てた。朝の空氣が靜かにゆれるなかを、彼女はアトリエの隅に進んだ。そして右の手をあげて、頭をかたむけてポーズした。あゝベルリンの宿。ホフマンのためにしたあのポーズであつた。淋しかつた悲しかつた。朝霧より外に見るものもない此裸身。見せたい、畫いてもらひたい。隣の室に眠る愛人よ。起き出でゝ見てくれないか。

カタと音がして窓がゆれた。風の吹き廻しでスー〱と朝霧が窓の隙間から室の内に入つて來ては、末は薄雲の樣に消えて行く。いつの間にか旭の光が霧を紅くした。

ドール孃の心がなごやかに全身を流れた。愛するものゝためにポーズするそのうれしさがとろ〱と身をとろかして來る。壁の一箇所を見つめた眼をかすかに動かせば、其處にはホフマンもない、小林も居ない。只自分一人だけのアトリエであつた。

かすかに、かすかに腰のあたりがチクと痛んだ。動いてはならぬ。今自分はポーズして居るのだ。かすかにかゆい所がある。それは足らしい。まだ動いてはならぬ。

快よいかゆさを堪へながらドール孃は微動だもしない。もう堪へられなくなつて來る。ハツとして右手をのべて足を打つた。そして手を足から放てば、掌に眞紅な血がついて居る。黒い秋の蚊が平たく掌につぶれて居た。氣味惡くなつて其手を中空にうかせながら、まだかすかにかゆい足を見れば……蛇！　蛇の長く出す舌のあたりに血がベツトリとついて居た。ゾツとして彼女は掌で血をこす

りとつた。刺青された蛇？ うちももにどぐろをまく蛇は！……執念深くもホフマンは蛇となつて彼女の身に食ひ込んで居るのである。

四

午前の日光は秋空から照りかゞやく。安らかの眠りからさめた小林は、美しく化粧をすませて居たドール孃と二人で家を出た。

日佛交驩の展覽會はまだ朝の間の人々が少かつた。二人は靜かに小聲に話しながら室々を見た。裸身ばかりの特別室に、小林が名刺を出して入つた時、ドール孃は一枚の畫の前でハッとして失神せんとした。小林は驚いて彼女を後から抱きかゝへた。

「どうした。」

ドール孃は眼をひらいたまゝ顔面筋を極度に緊張させて居る。血の氣が全く失はれて居た。

「マルゴ！ マルゴ。」

小聲で女を抱きかゝへながら小林は女の頭を越えて裸身を見た。その瞬間小林もハッとして手の力をゆるめた。女は後に倒れんとした。小林はそれを又抱き代へた。

小林はヂッとその裸身像を見つめた。それは彼女であつた。まがふ方なきマルゴであつた。其美しいまなざし、それは戀を語らなくて何を語るのだ。其肉線は戀でなくて何なのだ。

畫面の片隅に目を動かせば、Kホフマンとはつきりとかゝれて居るではないか。小林は彼女を抱きかゝへて特別室を出た。そして休息室へつれ入つた。一杯の水にドール孃は氣をとり直して來た。涙が頰を流れる。小林は一語も發せずに、ドール孃の手をひいて、會場を出て了つた。そして一臺の自動車をよびとめて投げ込む樣にドール孃を押し込んで自分もとびのつた。

自動車の內でドール孃は小林のひざの上に倒れて居た。小林は譯も分らぬ衝動にかられて何度となく、彼女の唇に接吻した。彼女は死の靜けさで小林のなすまゝにして居た。

極度の興奮に疲れきつて小林は友のアトリエに歸つて來た。ドール孃は血の氣の全くない顔で、小林の腕にすがつて家に入つた。ソファの上にドール孃は倒れたまゝ紫の唇をかたくとぢて居た。小林は牀に膝を折つて其傍について居た。一語をも發せず二人は時の過ぐるのを知らなかつた。

小林は心の落著くと共に見てならぬものを見て了つたのを感じた。ホフマンと云ふ名のどう云ふ人であるかは考へても見なかつた。どう云ふ機緣で畫かれたものであるかも考へて見なかつた。たゞ見てはならぬ繪を見て了つたのを悔いた。

此繪に就いてマルゴに問ふ事をしてはならぬと思つた。知らずして過ぎるべき事を知らなくてはならなくなるのを悔いた。

マルゴのいとしさには變りがなかつた。何もきくまい。きいてはならぬ、と覺悟して彼は靜かにソファに倒る丶彼女を一人のこしたまゝアトリエに入つて了つた。友の製作をあれこれと見て居たが、矢張り心は鎭まらなかつた。

思ふまいとしても不安と不氣味さとが心を占領して來た。二三時間の時が過ぎた頃、小林は自ら大分心の落着いて來たのを感じた。すべてが明瞭になる方がいゝと思つた。どう云ふ事が表面に出て來ても、自分の彼女に對する愛は衰へてはならぬと決心した。大きな愛で彼女を許せばよい事だと思つた。疑つて居るのは罪惡だと迄も思つた。

一思ひにきいてやらうと思つて立ち上つて見たが、果して彼女が打ち明けてくれるかどうかゞ又心がかりになつて椅子に腰を下ろした。

が時は過ぎて行つた。小林はもう不安に堪へ難くなつて了つた。

「男らしくきくだけきいてやらう。その方が彼女を愛するものゝ態度だ。」

彼は勇氣を起してソッとドアをあけて彼女の居るべき室に入つた。

その室には誰も居なかつた。いつの間に彼女は此室を去つたのであらう。小林はソファの上に誰も居らぬのを見て、次の室へ行つた。女中が一人縫物をして居るだけであつた。

「何處へ行つたのだらう。フランスの人は。」

女中は眠たげの目をあけた。

「先程おでかけになりました。」

「出かけた？　どんな風をして。」

「たゞおでかけになりました。」

「何か云つたか。」

「何かおつしやいましたが、私には分りませんでした。」

小林は極度の不安におそはれた。あたふたとソファの室にもどつた。ソファの上に一葉の端紙があつた。小林は盜む樣に紙片を手にとつた。

「……永久のお別れのために……」

それきりであつた。小林は紙片を握りしめて窓外を見た。月はキラキラと照つて居るけれども只秋草の花のみの京都郊外に人の姿は見えなかつた。

小林は頭をかゝへてソファに仰向きに倒れた。悔恨の涙が一時にわき立つて來た。

五

日佛交驩繪畫展覽會場で、思ひがけなくも伯林でホフマンが畫いた自身の裸身像を見て極度の

衝動を受けたドール孃は、すべての破綻の日の來たのを感じた。

伯林で世界大戰亂の序幕のきつて落された夜、軍服を著て出發する相愛の人ホフマンの軍刀のつかにすがつて、泣きつくした時、もう進軍のラッパは伯林の町の辻々に鳴りひゞいて居た。

故國を異にし、且不運にも二人の故國は敵として戰場に見える事となつた時、二人は泣いて別るゝより外なかつた。

悲しく伯林の宿に遺して來た裸身像……もし戰後にも巴里がフランスの領土であつたならば、此裸身像をサロンに出品してくれ、俺は恐らく再び此伯林に歸る時があるまいから……と云つて遺して行つた裸身像を、ドール孃は巴里迄持つて來る事が出來ぬ程、戰禍は伯林の町を危險にして居た。

そのまゝ淋しく伯林の宿に遺して來たあの裸身像が誰の手によつてサロンに出品され、それが日本迄運ばれたのであつたらう。

ドール孃は一眼で自身の裸身像を見分けた瞬間、云ひがたき恐怖に襲はれた。伯林の最後の夜、ホフマンが興奮の極、彼女の內もゝに蛇の刺青を施した時、その時、彼女は生涯を通じて我心のみならず我身も、ホフマン一人のものとなつたのを、心から喜んだのであつたが……今は。……。

惡い邪執として肉身に深く刻まれた蛇……それはホフマンその人の心である。戰場の露と消えたか、それともまだ生きて我身をたづね求めてか。恐怖すべき邪執のために自分は今となつても、……

心から愛する小林を得た今日も尙、……邪執のために身と心をさいなまれつくして來た。

海を越え、あらゆる苦難に堪へて辛うじて逢ふ事の出來た小林と、やつと心を安んじて相愛した一夜の翌の日を選んで、又しても邪執そのもの、姿を見るとは。

ドール孃はすべてを覺悟して了つた、小林が悲しくアトリエに去つたのを知つて、彼女は淚を收めてソッと家をぬけ出したのであつた。

行くべき所はなかつた。たよるべき胸はなかつた。唯小林の傍に居るにしのびなかつた。小林は前夜もモデルになれと云つた。そして製作を賣つて巴里迄の旅費をつくるとうれし氣に云つて居た。我身をモデルとしての製作に專念する小林を思へば、うれしさは女性の身に比ふべきものもないのである。唯邪執の蛇をどうしてかくし終へよう。

然も今自分をモデルとした繪が此世にあるのを知つて了つた小林である。モデルになる事を小林は何度巴里時代に願つたか知れない。それを遂に一日のばしにして來たのも、小林の愛をつなぎたいためばかりであつた。

ドール孃は行くべき所もなく家を出た。賴るべき胸もなく家を出た。彼女は破綻の日の來たのを知つて、もう何事をも將來に關する事は考へなかつた。唯小林をはなるゝ事のみを一すぢに希つた。

彼女は行くべき所もなく京都の驛頭に立つた。何處へ行つたらばよからうか。誰をたよつて行くべ

きか、呆然として彼は發車時間を知らせるベルをきいて居た。
突然彼の肩をかるく叩くものがあつた。
「ドール孃！」
ドール孃はハツとして後を振り向いた。海軍士官の一人が其處に立つて居た。
「どちらへ。」
ドール孃はいよ〳〵驚いて彼を見つめた。
「どなたですか。」
海軍士官はそれに答へなかつた。
「お一人ですか、どちらへ。」
「どなたですか」
再びドール孃はきいた。海軍士官はドール孃の周圍を見廻して、確に彼女がたつた一人であるのを知つて、小聲で云つた。
「坂上です。刺青の男です。」
「まア……」
ドール孃がおどろいて言葉を發しようとした時、海軍士官は言葉を押しとゞめさせて云つた。

「何も云はなくていゝのです。すべては後に話します。危險がせまつて居ます。私と一緒に汽車にのつて下さい。」
其言葉の調子は命令句調であつた。ドール孃は考へる暇がなかつた。
「行きます。何處へでも。」
刺青の男は切符をかつた。
「さア。」
うながされてドール孃は彼の後について改札口を通つた。下關行きの汽車が彼等二人をのせてプラツトフオームを滑り出した。
まだ二人とも物を云はなかつた。ドール孃は不安と焦慮と絶望とに追ひ立てられながら、尙一縷の望みを刺青の男に持つて居た。

六

汽車が山陽の海濱を走る頃になつて、ドール孃は初めて小林の云つた言葉を思ひ出した。今迄日本で逢つた人達は皆危險の人達です……。ドール孃は此言葉を思ひ出した時、先づ自らその言葉を打消して見た。が矢張り忽ち海軍士官の服装をして來た坂上を見て、氣味が惡くなつて來た。

「何處迄行くのですか。」

ドール孃は追ひかけらるゝ不安のためにかう問うて見た。

「食堂車へ行きませう。」

初めて坂上は口を開いて、席を立つた。ドール孃は坂上の後を追つた。

食堂車は丁度食事時間の間なのですいて居た。ビールを註文してから坂上は小聲で話し出した。

「とにかく此汽車に乘り込むのが目的だつたのです。早速引き返してもいゝのです。だがどうしてあなたは小林さんと一緒に居た京都の家を逃げたのです。それを話して下さい。」

ドール孃は何も彼も知つて居る刺青の男に驚いた。が小林から離れて來た理由は話す譯にはならなかつた。やむなくドール孃は坂上に反問した。

「どうしてあなたは私が小林と居たのを知つておいでになるのですか。」

「それは何でもない事です。只私はあなた方が恐らく京都へかくれて居るだらうと直覺したのです。その調子で私はあなた方を日佛交驩展覽會で待つて居たのです。そしてあなたが、あなたの裸身像の前で失神しさうになつたのを見ました。」

「まァ。」

ドール孃は刺青の男が意外の事迄知つて居るのに氣味が惡くなる程であつた。

「ドール孃、ホフマンと云ふ畫家は獨逸の畫家ですな。そして其人にだけあなたはモデルになる事を許したのでせう。」

ドール孃はかう云はれて今更何事をかくしても無駄だと思つた。

「さうです。そのために私は小林から逃げなくてはならなくつたのです。」

「小林さんはあなたにモデルになる事を要求したのでせう。そしてそれをあなたは怖れたのでせう。」

ドール孃はこれ以上の事を云ふ元氣がなくて返事をしなかつた。

「分つて居るのです私には。あなたの祕密が小林さんに知られるのをあなたは怖れたのです。刺青を…………」

ドール孃はぐん／＼云つてのける刺青の男に全く降服して了つた。

「すべてが私には分りました。で、ドール孃、あなたはどうする積です。これから。」

ドール孃は心細さうに顏をあげて坂上を見つめた。

「どうしたらばいゝのでせう。坂上さん。」

「どうです。私と一緒に日本を逃げて下さいませんか。」

坂上は思ひきつて云つた。彼の言葉は熱情に滿ちて居た。ドール孃は驚いて坂上を見つめて居るばかりであつた。

ドール孃、あなたは今でも小林さんを愛して居るのですか。」

坂上は最後の問のつもりでかう云つてドール孃の眼を見つめた。一二分の時間が過ぎてドール孃はしつかりした調子で云つた。

「私は小林さんを愛して居ます。」

坂上ばなやましいまなざしでドール孃を見返した。

「小林さんはあなたを今も愛して居るのですか。」

「愛して居ます。」

ドール孃は斷定的に云つた。坂上は一時絶望の表情をしたが、忽ち元氣を回復した。

「ではお互に愛しあつて居るのに何故あなたは、小林さんからはなれて出たのです。」

ドール孃はなやましい顏をして坂上を見たが、小聲で云つた。

「二人の愛の破綻を怖れたからです。」

「分りました。破綻を怖れて、何とか彌縫策を講ずるために。」

「さうです。」

「あゝ。……」

坂上は全く絶望して了つた。と同時に彼の心には油然としてあきらめの底からわきたつものがあつた。

「ドール孃、どうか私の云ふ通りになつて下さい。私はきつとあなた方お二人の幸福をとり返すために努力します。」

「どうか。」

ドール孃は靜かに手を出した。坂上はその手に接吻した。王女に對する下男の樣に。

坂上はポケットから汽車の時間表を出した。そしてしばらく無言でそれを調べて居たが、急に椅子を立つた。

「ドール孃、次の驛で下車しませう。そして又京都に向つて歸りませう。」

「え？」

ドール孃がきゝ返した時、既に汽車は驛に入つて進行をゆるめて居た。

七

深更に汽車は京都驛についた。汽車中から坂上が打つた電報のために、意外の思ひで小林は驛に出てドール孃を待つて居た。

驛頭でドール孃が泣きながら小林と抱き合ふのを見ながら刺青の男は、無言のまゝ立つて居た。

「どうも有難う、あなたが居なければ、マルグリットは恐らく死んだでせう。」

小林はかう云つて坂上の手を握つた。坂上は落着いて答へた。

「小林さん、およろこびになるのは未だ早過ぎます。御迷惑でもこれからあなたの假寓迄私もお供したいのです。」

「どうぞ、さうして下さい。」

三人は自動車で郊外のアトリエへ急いだ。自動車が家についたのはもう午前の二時近かつた。更け渡つた初秋の夜に三人は椅子によつて相對した。

刺青の男が先づ口を開いた。

「小林さん。私は心をかくして居る事の出來ぬ男ですから、何もかくさずにお話したく思ひます。自分の事を先づお話します。私はドール孃を愛して居ます。いつ頃からかは自分でも判りませんが、最近になつて自分が確にドール孃を愛して居るのを感じました……」

刺青の男はかう云つて後、ドール孃を見た。そして同じ事をフランス語で云つた。それから後は靜かな調子のフランス語を續けて行つた。

「……私はあなた方お二人が相思の仲であるのを知つて居ます。私は今日汽車の中でドール孃の口から、今日もドール孃は小林さんを愛し、小林さんはドール孃を愛して居られるのをきゝました。實は二三日前中禪寺でドール孃が行方不明になつたのを知つた時、私は沁々かう思ひました。私がドール孃を愛するならば、男らしく愛して行くのが本當だ。どんな障害をも排して、又たとひあなた方二人が相思の仲であつても、そんな事には無關係にドール孃を徹底的に愛する……つまりドール孃をあらゆる障害の中からうばひとるのが男の態度だと思つたのです。今もさう思つて居るのです。だが一つ玆に私が考へなくてはならぬ事が出來たのです。それはドール孃が愛し愛さるゝ小林さんからはなれたと云ふ事です。その理由を知らぬならば私は自分の希望を達するのに絶好の機會なのでした。それで私はドール孃を汽車の内に誘ひ入れたのでした。

けれども私は矢張り妙な事になつて了ひました。私はドール孃が何故に小林さんからはなれて行つたのかを知つて了つたのです。その理由を知りながら、然も其理由が相愛の二人を別れしむる程のものでないのを知りながら、二人の間に出來た一時の隙を利用して、自分の希望を達するのは、餘りに卑怯だと感じました。それで私は再び京都へ歸つて來たのです。

ドール孃！　愛するものに祕密を持つと云ふ事は罪惡です。どうかあなたの口からすべてを小林さんにうちあけて下さい。私は自分の心を犧牲にしてあなたにそれをおすゝめするのです……」

刺青の男は此處迄云つて咽喉が乾きついて了つた。

沈痛な顏をして坂上の言葉をきいて居たドール孃は、坂上の熱情に動かされざるを得なかつた。低

いながらしつかりした言葉で云つた。

「坂上さん、私はあなたに心から感謝します。私は今迄虚僞の愛を小林さんに注いで居たのでした。小林さん、私の罪を許して下さい。私はあなたから再三モデルになる事を責められました。それを理由も云はずに拒絶して居ましたのは私の虚僞な心の現れでありました。

私の肉體には一つの刺青があります。それは蛇です。私の右の内股には蛇の刺青があるのです。私は世界の大戰亂の前に伯林に行つて居ました。そしてホフマンと云ふ獨逸の畫家と相愛の生活をして居ました。私をモデルにしてホフマンは昨日あなたと私との前にあつたあの畫をかきました。あの畫が完成された時世界の大戰亂の幕はきつて落されたのです。別れの夜ホフマンは私に刺青をしました。其刺青が蛇なのです。

私の心にはホフマンは現在は決して巣食つては居ませんが、私の肉體にはホフマンが蛇となつて邪執を遺して居るのです。

私はそれをかくしながらあなたを愛しました。あなたは何も知らずに私を愛して下さいました。私は愛するあなたのためにどれ程モデルになりたかつたか知れません。けれども蛇と共に私へのあなたの愛が薄らぐのばかりを心配して居ました。

私はあなたの後を慕つて日本迄來ました。そして私は刺青を一日も早く抹殺するために、森ドクトルにそれをたのみました。私は痲醉劑をかけてもらつて刺青を抹殺して貰ふ積でした。森ドクトルが私に對して其機會にした行爲は……それは私の妄想であるとも云はれて居ります……私自身の油斷だつたのです……」

ドール孃が此處迄云つた時、小林は言葉を挾んだ。

「マルゴ！ もうすべては分つた。」

三人は顔を伏せて呼吸をはずませた。

八

三人に沈默の永い時が過ぎた。坂上が靜かに云つた。

「小林さん。すべてはお分りになつたでせう。私はこれで滿足なのです。小林さん。ドール孃のすべての祕密があなたに知られた今となつて、私はあなたに伺ひたい事があるのです。その前に私は私の本心をしつかり、も一度お話しなくてはなりません。私はドール孃を愛して居ます。それを申上げて後伺ふのです。あなたはドール孃を愛しておいでになりますか。」

「愛して居ます。以前と同樣に。」

此答をきくや否やドール孃は小林の胸にとびついた。二人の頬に唇に接吻の雨が降つた。

坂上は默つて二人を見つめて居た。心はわき立つ程いら／＼して居た。

「すべて分りました。ドール孃！　小林さん。お二人の幸福を私はいのります。それしかないのだ。けれども小林さん、どうか私がドール孃を愛する事だけは許して下さい。それで私は滿足なのです。」

坂上は机の上の帽子をとつた。小林が追ひかける樣に云つた。

「坂上さん。あなたの心はあなたの自由です。けれども私はあなたに一つの無理を云ひたい。どうかもうマルゴを忘れて下さい。」

「出來ません。そんな事は出來ません。」

坂上ははふり落つる涙をそのまゝに云つた。ドール孃はなやましく坂上を見たまゝ、何も云はなかつた。

「小林さん。もう一つ我まゝを云はせて下さい。私はも一つ愛するドール孃のために云はなくてはならない事があるのです。ドール孃の身は今かなり危險なのです。ドール孃が先日祕書として雇はれたコエンスキーと云ふアメリカ人はＰＰＲの首領です。有名な寶石强盜の首領なのです。ドール孃の搜索願がフランスの大使館から出ましたので、それに關聯してＰＰＲが日本に來て居る事が分つた筈です。それでドール孃には何の罪がなくとも、危險は危險なのです。一日も早くドール孃は日本から出發なさる事が必要になつて居るのです……」

小林はＰＰＲときいてゾッとした。あの有名な强盜團の首領とドール孃とが關係があると知つては氣味惡さが全身を這ひ廻つて來た。

「さうですか。それは危險だ。」

「だから一日も早く日本を立つておしまひにならなくてはいけません。金はどうです。金はありますか。」

小林は金と云ふ言葉をきいてハタと當惑した。

「金はないでせう。これをあげます。」

坂上は軍服のポケットから寶石箱を出して机の上に置いた。それを見たドール孃は聲を立てた。

「これは、あの……」

坂上はすぐに云つた。

「さうです。ドール孃！　あなたがコエンスキーから貰つた寶石箱です。コエンスキーはあなたを此寶石箱でだましたのです。そしてあなたを利用してまだ多くの財寶を日本の内地へ密輸入して、それから佛領印度へ旅立つ豫定だつたのです。恐らくはあなたは佛領印度で用のない婦人として一行から捨てられる所であつたでせう。」

ドール孃は小林に抱かれながらブル／＼とふるへて居た。

「然し御安心なさいまし。私は正式にコエンスキーから貰つたのです。私はコエンスキーにあなたを熱愛して居る事を話しました。そして男らしくあなたをすべての男から奪ひとる事を誓つたのです。その目的を達するために私は此寶石をコエンスキーから正式にもらつたのです。私はこれをあなたにあげるために手に入れたのです。だからこれは當然あなたのものです。」

物凄さにふるへるドール孃を抱きながら小林はその時口をはさんだ。

「坂上さん。あなたの御好意はよく分つて居ます。けれども私は私の愛する此女のために、それを藏くのをお斷りしたいのです。マルゴお前は？」

「坂上さん、どうか私を助けて下さい。私は恐ろしいのです。見るさへ恐ろしい寶石です。」

坂上はヂッと寶石を見つめて居た。

「さうですか。それもいゝでせう。ではやむを得ません。私はあなた方が私の好意をうけ入れて下さるかどうかを考へずに、あなた方のために巴里迄の旅費を至急造つて來ませう。然し決して此寶石とは無關係に金をつくります。私一人だけで自力で金を造つて來るでせう。此寶石をそれ迄あづかつて下さいまし。

あゝ、すべては終つたのだ。私は又世界の隅々迄船夫となつて渡り歩くでせう。では私はこれで歸ります。今度來る時はきつと金を持つて來ます。さよなら。」

風の如く彼は立去つた。小林とドール孃とは坂上を送り出す事も出來ぬ程の恐怖の下に抱きあつたまゝであつた。

刺青師の家

一

京都三條上ルの素人家の前に印袢纏の男が、キヨロ〳〵と往來を見廻した後立ち止まつた。彼はスツと格子をあけて入つた。

「源之丞さんはおいでかな。」

小女が出て來て叮嚀にお辭儀をした。

「わしは東京本所の春吉さんから敎はつて來たものですが。」

小女は內に入つた。程なく六十過ぎた老人が出て來た。

「何か書付でも持つて來られたか。」

「はア、これを。」

印袢纏の男は一本の手紙を出した。老人は封をきつてスラ〳〵と手紙を讀んだ。

「分りました。どうぞ。」
老人の後について男は奥まつた座敷に通つた。
「大變お急ぎかな。」
「急いで居るのです。もつとも、すつかり出來たのを道樂でこはしかけたのを、又舊の通りにしたくなつたんですからな。」
「さうか。一寸おいで。」
老人は庭下駄をはいて離れ座敷に男を案内した。其室には刺青の道具と繪具が所せまき迄にちらかしてあつた。
「どれ見せておくれ。」
男はスパツと印袢纏をぬいで背中を出した。
「うゝ、美事だ。」
男の背を充たす刺青を見て老人は感歎の聲を發した。
「だが、こいつは場所はづれだな。大方ハワイあたりだろ。」
「圖星！ そのハワイです。」
「いか樣さうだろ。男と女が舐つこをして居るぜ。おや男の眉は？」

「だからさ。その眉がうすくなつたのを直して貰ひたいのだ。」
「どうしたのだね。惜しい事をしたものだ。あんたは混血兒だね。おやぢか、お袋か。」
「そりやお袋が日本人だろと思つてるが。」
「とにかく美事だな。わしも隨分自分でもほり、又他人のほつたのも見たが、これ程のは見た事がない。ほる方もほられる方も辛棒があつたな。」
「二年かゝつた。」
「さうだろよ。でどうしたんだ。男の眉をとつて了つては。」
「いやになりましてな。すつかりとつて了ふ氣になつて醫者にかゝつたんだ。」
「醫者？ 醫者が刺青をとれるかな。」
「文明開化だよ。雪狀炭酸と云ふのでとれるんだ。」
「ふうん、で眉を植るのだな。」
「さうだ。たつぷり出すから。」
「金はどうでもいゝのだ。とにかくこんな美事のは見ないから、たのしみにやつて見やうぜ。」
「だが、急いでるのだから。」
「急ぐつて嫁でも貰ふのかね。」

「うゝん、外國へ行くのだ。」
「さうか。とにかくやつては見るが、一月近くはかゝるだろ。」
「一月？　そいつは永すぎる。なるだけ早くたのみますぜ。痛さは何ほでも辛棒するから。」
「あゝ。だが墨色が合ふかどうか分らないからな。」
「一寸わしの背にほつて見れば分るだらう。」
「うん。」
刺青師は男の背に廻つた。
「裾のきものに筋を入れて墨色を試して見るぜ。何年前だね。」
「七八年になるかな。」
「七八年？　では又新しい辛棒だ。」
刺青師が細筆で裾に一線をひいて、針をにぎつてチクとさした。
「痛いか。」
「生きてるのだからな。」
「うん、今時には珍しい御仁だ。ピクともしない。戀か、かたきか。」
「きまつてらア、戀でなくて此辛棒が出來るか。」

「ふゝ、戀の取次か。うらやましいな。誰だつてあんたにはほれるよ。」
「ところがこつちばかりの戀で、何にもならないのだ。」
チクリと又針をさす。
「うゝ、いゝ氣持だ、畜生、これでもほれねえのか。」
「辛棒、辛棒。ほれる迄辛棒するさ。刺青と戀は辛棒だ。ほれる迄辛棒すべし。」
「まアいゝや。」
刺青師が墨を拭つて、縦に横にすかして見た。
「墨色はあつてるよ。眉の外は完全無缺だ。」
「眉ずみ位十日で出來ないかね。」
「あんたなら出來るかも知れぬえ。とにかく毎日朝の十時から來ないか。うらから來るんだぜ。」
「あゝ。おゝいてえ。油斷を見すかしちやひでえな。」
「あはゝ、今日は墨色だけにするかな。」
「金は。」
「よせよ。金はいらねえよ。ほれた阿魔つちよを見せてくれりや、それでいゝや。」
男は印袢纏をきた。

二

坂上からの電報でコエンスキーは單身京都に來た。京都ホテルに舊ロシヤの貴族カヂンスキーと名乘つて泊つた彼の室へ、海軍士官の服裝をした坂上はしのびやかに入つて行つた。

「やア、いつ來た。」

坂上は自分の服裝を氣にしながら云つた。

「たつた今來たばかりだ。中禪寺からの電報を見て、早速鎌倉にかくれて居たが、配下のものからの電報で早速やつて來たのだ。一體事件はどうなのだ。」

「實は意外の事になつて了つてね、君が雇つたフランス貴族の搜索願が大使館から出たので、君が中禪寺を立つた後で、警察から調べに來たのだ。自然君達の事もばれると思つたので、高飛車に君達の事を話してやつたのだ。警察は手柄をしたさで飛び立つ程喜んだから君達はアメリカの强盜團で、日本の官憲とは關係がないと云つて、奴等の度膽をぬいて置いたのだ。まアあれで安心ではあるが、恐らく君等も何か日本の官憲からにらまれる事がないではなからうからあの電報をうつたのだ。」

「夫ば有難う。幸まだ日本では大きな仕事はまだやらない。唯密輸入位のものだ。だがフランス貴族を誘拐したと云はれて、檢擧されゝば仕方がないのだ。」

「とにかくあまり大つぴらでは危險だよ。早く日本を出發する方がいゝだらう。」

「さうだ。一應引きあげる方がいゝかと思ふよ。で急用と云ふのはその事か。」

「それなのだ。」

「さうか。だが明後日にせまつて居るアメリカからの船で來るものには困るが。」

「其れなのだ。ドール孃の行方が分つたよ。」

「分つた！　そいつは君のためにもお目出度い事だ。どうした、それで男らしくドール孃を手に入れるのか。」

「あゝ、それに就いて君にたのみたい事があるのだ。金を一萬圓程都合してくれないか。」

「一萬圓？　事の次第によつては。」

「勿論ドール孃のためなのだ。然し俺は唯一萬圓を君にねだるのではない。相當なものを提供するのだから。」

「ドール孃を手に入れて手先に使ふと云ふのだらう。」

「勿論さうだが、一萬圓の價値のあるものを俺は君に提供するのだ。」

「一萬圓のもの？　へい、何だ。」

「一寸待て。……」

坂上はスツと上衣をぬいでシヤツをとつた。彼はクルリと裸の脊をコエンスキーの鼻先に出した。パツと目もあやな刺青がコエンスキーの前に展開された。

「う丶……」

とコエンスキーはうなつた坂上は脊を丸くして動かない。

「怪異！　凄美！」

と彼はうなつた。

「で。……」

……坂上はクルリと身をかはして顔をコエンスキーに向けた。

「買つてくれ！　一萬圓で。」

「う丶。……」

とコエンスキーは又うなつた。

「寶石よりは價値があらうぢやないか。」

「ある！　たしかにある！」

「で、たのむのだ。俺が死んだらば、此刺青は君のものなのだ。一萬圓は安からう。」

「安い！　たしかに安い！」

「だが君は心配なのだらう。俺がいつ死ぬか分らないから。」

「さうだ。」

コエンスキーはたつた今見た世にも稀な刺青に心をひかれながら云つた。

「心配するな。十日とたゝぬ間に此刺青は君のものになるのだ！」

「とは。」

「分つてるぢやないか。死ぬんだ。俺は死ぬんだ。」

「ほんとか。」

コエンスキーが氣味惡くなつて云つた時、坂上はスツと立ち上つて、ズボンのポケツトに手を入れるや否や、ピストルを出してコエンスキーの腦天をねらつた。

「出すか。出さぬか。」

コエンスキーはぶる〱とふるへた。

「出す。出す。おどかすな。」

坂上はピストルを向けたまゝ云つた。

「俺は日本人の血をうけて居るのだ。ハラキリの子孫だ。約束は立派に守つて見せる。きつと十日後には刺青を君に渡すのだ。」

コエンスキーは恐しさにふるへる聲で云つた。
「死なゝくてもいゝのだ。金は出すから。」
「うゝん、死ぬ。きつと死んで見せる。俺は日本人なのだ。」
坂上はカタとピストルを机の上に置いた。
「コエンスキー、一萬圓はたのむ。」
「うん、出すとも。明日でいゝか。」
「明日の午後六時迄だ。」
坂上は何事もなかつた様に手を出した。コエンスキーはその手をかたく握つた。
「よし、承知した。」

三

午後六時の鐘を京都ホテルの大時計が打つた。
「コツ、コツ」
印袢纏の男がコエンスキーの室のドアを打つた。
「お入り！」

ドアをあけて印袢纏の男が入つた。
「約束の時間だ！」
コエンスキーは異様の姿をして來た男に驚いてしばらくは、呆然として居た。
「分らないだらう。坂上だよ。」
「あゝ、さうか。」
「一萬圓を貰ひに來た。」
「うゝ、準備してある。」
コエンスキーはポケットから紙幣束を出した。
「さア一萬圓。」
坂上はそれを請取つた。
「有難う。君の如く俺も間違はない。」
「坂上君刺青の方はどうでもいゝのだ。ドール孃をたのむよ。」
「おい。」
と坂上は力強く云つた。
「……ドールの方は俺には分らないぜ。それは彼女の自由意志だから。とにかく俺は一萬圓で刺青は

賣つたのだ。」

「それは分つて居る。だが俺の方は刺青よりはドール孃の働きを希望して居るのだ。」

「それも分つて居る。今これから談判には行くが、それはどうなるかは分らないのだ。俺の刺青は決して間違はないが。」

「いや、俺は刺青を買つたのだ。一萬圓では安すぎるので、ドール孃の方を希望するのだ。」

「よく分つては居る。今から行つてくる。」

「その風で？」

コエンスキーは坂上の印袢纏をしげ〳〵と見た。

「あゝ、これで行くのだ。俺が何故にこんな風をして居るか、君には分るまい。俺は君に日本人の心を見せたいのだ。一萬圓で賣つた刺青だ。瑕があつてはならない。よく見てくれ！」

坂上はスパリと印袢纏をぬいで背をコエンスキーに向けた。

「よく見ろ、男の眉が薄からう、その眉を濃くするために、俺は京都の刺青師に通つて居るのだ。どうせ賣るならば完全無缺のものを賣るのだ。刺青師に通ふ服裝がこれなのだ。」

坂上は印袢纏を手にとつて振りながら、身をかはしてコエンスキーを見た。

「さうか。痛くないか。」

「痛いさ。その痛さに堪へしのぶのが、俺には戀よりも女よりもうれしいのだ。」

「ふん。」

「分るまいな。君には分るまいな。」

坂上は机の上からコエンスキーの出した一萬圓をうけとつて印袢纏の袋に入れた。

「契約書は？」

坂上が云つた。

「造つてある。これだ。」

コエンスキーが一葉の紙を出した。坂上はそれを讀んだ。

「……坂上敬三は契約の日より十日以内に背部にある刺青をピー・コエンスキーに賣渡す事を誓ふ。其代價として一萬圓をコエンスキーは支拂へり……」

坂上はペンをかりて正しく署名した。コエンスキーはそれをポケットに入れた。

坂上君、刺青は俺の所有に歸するが、それは誰の手ではぎとるのか。」

坂上は嘲る樣に笑つた。

「心配するなよ。俺を信用し給へ。大丈夫だから。」

「さうか」

「大丈夫だ。安心し給へ。」

坂上は落著いた足どりでコエンキスーの室を出て、ホテルの玄關に待たせてあつた自動車にとび乘つた。

三十分程して彼の乘る自動車は郊外の大友畫伯のアトリエの前でとまつた。坂上はアトリエの入口でベルを押した。小女が出て來た。

「小林さんは？」

小女は異樣な風采をした訪問客に一時返事をしなかつた。

「坂上と云ふものです。小林さんにお目にかゝりたいのです。」

「お留守です。」

坂上は小女の顔色で實際小林の居らぬのを見てとつた。

「では、小林さんと一緒に見えたフランスの女の方は？」

小女は稍安心した樣に答へた。

「その方はいらつしやいます。」

坂上がお目にかゝりたいと云つて下さい。……あゝ言葉が通じないな。今かきます。」

坂上は名刺に「刺青の男」とかいて小女に渡した。程なく玄關にドール孃が表れた。

「刺青の男です！」

「まア……」

ドール孃は坂上の風采を頭から足迄見上げ見下ろした。

四

友人に逢ひに出たと云ふ小林の留守に、坂上はアトリエでドール孃と二人ぎりで逢ふ事が出來た。

「ドール孃！　恐らくはあなたと二人ぎりで、話すのは今日が最後でせう。私の心中は先日あなたにもあなたの愛人小林畫伯にもお話しました。私はあなた方お二人の巴里迄の旅費と、巴里滯在に必要な金を持つて來たのです。」

ドール孃はとび立つばかり喜んだ。

「有難う。小林も今日はその金で友人を訪問したのでした。歸つて來たらばきつとあなたの御厚意を喜ぶでせう。」

「私は小林畫伯とは關係がないのです。唯あなたのために金を造つたのです。」

坂上は印袢纏の袋から一萬圓の紙幣束を出して封をきつてドール孃の前に出した。

「ドール孃！　私はあなたのために私の刺青を賣つて金を造りました。」

「刺青？」

「えゝ、刺青です。あなたは刺青のために戀を失ふのを心配して居たのです。私は刺青のために私の愛人を救へるのです、きいて下さい、私は本氣で刺青を賣つたのです。」

「誰に。」

ドール孃は半ば坂上の言葉を疑つて問ひ返した。

「それはお話する時期でない。私は堂々と自分の刺青を賣つたのです。そして買人のために、森ドクトルが抹殺しかけた部分を今再び完全なものにするために、刺青師へ通つて居るのです。」

ドール孃は坂上の言葉に異常な感激をうけた。

「まア。」

「私はあなたを愛して居るのです。私は今日から十日目に、私の刺青を完全なものとして、買人に渡さなくてはならないのです。それが私の戀の終りなのです。私は眞劍であなたに戀して居るのです。だが御安心なさい。私はこんな事を云つて、あなたの心を動搖させようと思ふ程卑劣な人間ではありません。私は男らしくあなたを愛し續けて行くのです。私は愛の報酬など求めはしないのです。さア一萬圓ならば、あなたと、あなたの愛人とは無事に巴里生活が當分は出來るでせう。早くあなたは私の厚意をうけて、私を安心させて下さい。」

坂上の言葉は惻々としてドール孃の心を射た。

「よく分りました。あなたの御厚意は有難くうけます。」

ドール孃はテーブルの上の紙幣を手さげの内に入れた。

「ドール孃！ あなたは私の心が分つてくれたでせう。であなたに一つの遊びをしてもらひたいのです。と云ふよりは、あなたに一つの遊びが出來たと云ふ方がいゝかも知れない。明日の午前十時に、三條上ルの刺青師の源之丞を訪ねて來てはどうです。私は其處で私の刺青の復興をやつて居るのです。」

坂上は紙の上に地圖をかいた。そして源之丞あての紹介狀をかいた。

「此紹介狀をもつて來て下さい。私はそれだけをお願ひしたい。」

「行きます。きつと行きます。」

ドール孃は興奮して云つた。

「それで私は滿足する事が出來るでせう。ではさよなら。あなた方の御幸福をいのります。」

坂上は拳でわき立つ涙を押しぬぐつて立ち上つた。

「小林が歸りましたらば、すべてを話します。」

「あゝ。それはあなたの自由なのですから。」

坂上はドアをあけて、消える様に立ち去つて了つた。
ドール孃はしばらくは呆然として立つて居た。何と云ふ男らしさであらう。何と云ふ日本的な男であらう。つくすべきをつくして何事も要求しない典型的な日本人を今日はつきりと見た。
すべての好意と共に報酬を豫期する歐米の人と、此日本人と果してどちらが本當の人間であらうか。
ドール孃は神に近い人を見たと感じた。いのらずして榮光をもたらす神を目のあたり見たのを思つて、彼女の心には油然としてすべての過去と將來とがなくなつて了つた。
ギーと音がしてアトリエのドアがあけられた。ドール孃は初めて我に歸つた。ドアのかげから小林が汗をぬぐひながら入つて來た。
「マルゴ、今お前を訪問したのは誰なのだ。」
小林の言葉にはとげがあつた。ドール孃は落著いて答へた。
「坂上さんです。」
「誰の許可を得て坂上と逢つたのだ。」
小林はつゝ立つたまゝ蒼白な顏をして居る。
「私の心の許可を得ました。」
「ふん……」

と小林は嘲笑したが、忽ち又態度を變へた。
「お前は俺を愛して居るのか。」
「愛して居ます。」
「愛さるゝものが愛するもの、許可なく、誰とでも逢つていゝと思ふのか。」
小林は二三歩ドール孃にいざり寄つた。

五

ドール孃は今迄になく不機嫌で居る小林に對して、どうしたのかすぐに謝罪する氣分になれなかつた。
「私はあなたの許可をあらかじめうけなくては誰にも逢つてはならないのですか。」
ドール孃の言葉は冷やかであつた。其冷やかさが一層小林をいらだたせた。
「勿論だ。特に坂上と云ふ男は、お前を愛して居る事を公言して居る男ではないか。」
「さうです。心をかくさずに云つて居る人です。」
「だから云ふのだ。何の必要があつてお前は坂上などにあつたのだ、然も俺の留守に。……俺が何のために今日外出したかをお前は知つて居るだらう。二人の幸福のために俺は金策に出たのだ。その留

守に何の必要があつてお前は彼に逢つたのだ。」

「私は坂上さんに逢ふ必要などないのです。けれども坂上さんは私に逢ふ必要があつて來たのです。」

「いよ〳〵不忠實ではないか。お前の方に必要がないならば、たとひ訪ねて來ても逢はなければいゝではないか。」

「私は誰に逢つても、あなたに不忠實にはならないと思つて居ます。私はあなたを愛して居るのです。」

ドール孃は今日はどうしても素直の氣分になれなかつた。

「まアいゝ。逢つて了つてからは仕方ない。お前は正直に彼との會見の内容を俺に打明ける義務があると思はないか。」

「それは思つて居ます。坂上さんはこれを私達二人に屆けるために來たのです。これです。」

ドール孃は坂上の置いて行つた一萬圓を小林の前に出した。小林は一萬圓の現金を見て甚だしく狼狽した。

「どうしたのだ。どう云ふ理由で坂上は金を屆けたのだ。」

「私を愛して居るからです。」

小林は不安に滿ちて言葉が出なかつた。

「坂上さんは私を愛して居るのです。其愛を……自分一人の心の内の愛を滿足させるために此お金を持つて來て下さつたのです。」

「いやだ。不愉快だ。そんな金は返して了へ。」

小林は唇をブル〳〵ふるはせて云つた。

「何故です。何故返すのです。」

「分つてるぢやないか。お前への愛と金との交換を俺が默つてうけ入れられるか。考へても見るがいい。」

「違ひます。さうではありません。私は此お金を請取つてやらなくてはなりません。坂上さんが此お金を私に下さるのは、こちらから云へば單純な好意と解すべきものです。他人の好意を無にする事は罪惡です。況んや坂上さんが私達の幸福のためにと思つて屆けて下さつたものをお返ししては一層罪を深くします。」

「お前の云ふ事はお前一人の理窟だ。俺はお前を愛する事を公言する男などから金錢上の補助はうけたくはない。」

「坂上さんはあなたに此金を屆けたのではありません。私に屆けたのです。」

「だから、いよ〳〵不愉快なのだ。返して了へ。」

「返せません。どうしても返せません。」
「マルゴ、お前は坂上を愛して居るのか。」
「決して愛しては居ません。唯彼の好意を感謝したいのです。」
「さうか、それならばお前の思ふ通りにするがよい。俺は俺でお前と俺とのために幸福を求める手段をとるばかりだ。」
「どうか、さうなさつて下さい。」
二人は互に心の離れて行くのを感じない譯にならなかつた。小林から云へば坂上の金をドール孃が喜んでうけ入れたのが不服でならなかつた。ドール孃は何故に小林がそれ程坂上をきらつて居るのかが理解出來なかつた。
二人は巴里時代にもない、いやな氣まづい心になつてにらみあつて居た。
小女が其時あたふたと入つて來た。
「小原さんと云ふ方が見えました。」
二人はやつと救はれた樣に顏をあげた。
「あゝ、お通ししてくれ。」
小原は輕快な洋服で入つて來た。

「やア。」
快活に聲をかけた小原は二人の樣子で何事かゞ起つて居るのを氣づいた。
「どうしたのだ。二人とも。」
「いゝ所へ來てくれた。今坂上が俺の留守に來たのだ。そして一萬圓置いて行つたのだ。」
小林の言葉に小原は晴やかに笑つた。
「そいつはよかつたな。それで俺も安心した。」
「おい、小原、君は本氣で云ふのか。」
「勿論本氣だよ。君等の幸福のために。」
「だが坂上はマルゴを愛して居るんだぞ。」
「それは俺も知つて居る。……なァんだ。小林、お前嫉妬して居るんだな。くだらん事はよせ。坂上と云ふ奴は不思議な存在なのだ。あいつの心は誰にも分らないのだ。貰つておけよ。」
小原はフランス語でドール孃にも同樣な事を云つた。三人は初めて笑ふ事が出來た。小原が云つた。
「とにかく愉快な事だ。早く船をとれよ。急いで立つんだ。」

六

背を丸くして坂上は刺青師の離れ座敷に坐つて居る。刺青師は男の眉を針で造つて居る。

「大將急いでやつてくれよ。俺ァ日のたつのが氣が氣でねえのだから。」

「あゝ。俺も千人越える程ほつて來たが、お前さん程眞劍の人には逢はなかつたよ。戀と云ふものは恐ろしいものだな。」

「片思ひだ。だから餘計に意地も出るんだ。」

「さうだらうな。」

刺青師が針に墨をつけた。其時障子の外から聲がした。

「旦那、お人が見えましたよ。」

「駄目だ。今は逢へねえよ。」

「手紙を持つて來たのです。異人さんです。」

坂上がクルリと頸を廻した。

「來たんだ。俺の戀人がやつて來たんだ。通してくれ、大將！」

「ふうん、女は異人か。」

「びつくりするなよ。」

刺青師がスッと立つて室を出た。坂上は微動だもせずに、背を丸くして居る。

音がして人の氣配がした。

「さアどうぞ。」

刺青師の後についてドール孃が入つて來た。坂上は背を向けたまゝ云つた。

「ドール孃此仕事場では一言も物を云つてはならぬ掟です。其處に立つて居て下さい。」

ドール孃は坂上の背にをどる刺青を見つめて緊張した。刺青師が靜かに坂上の後に坐つて針をとりあげた。針尖を握つて刺青師は皮膚をつき通した。ピク〳〵と背の肉が波を打つた、刺青師はギュッと皮膚を見つめて針をさしてはぬく。其度に背の肉がギュー〳〵と動いた。齒を食ひしばる音がキーキーと響いた。

「痛いぞ、これからは。」

刺青師が太い聲で云つた。坂上は一語も發しなかつた。

長い針が深く皮下迄通つた。針の跡から生血がもり上つて來る。刺青師は手拭で血を吸ひとつては又針を立てる。坂上の腕の肉がもり上つた。

「あゝ、たまらねえや。いゝ氣持だ。もつとしつかりやつてくれよ。」

「よし！」
刺青師がめまぐろしい程針をつき立てる。かすかに、坂上のうなり聲がきこえて來た。
ドール孃は蒼白になつて背を見つめて居る。ハッ、ハッと云ふ坂上のため息が室に充ちた。刺青師の顏からボタ〳〵汗がたれた。
「うゝ。」
坂上が遂に大きくうなつた。其時バタリと後で音がした。刺青師が頸を廻して後を見た。血の氣のない顏をしてドール孃が倒れて居た。
「やッ、いけねえ、氣絶した。」
「え？」
坂上が裸身のまゝスッと立つてドール孃に近づいた。
「水！　水！」
刺青師は案外落著いた調子で室を出て手桶に水をさげて來た。
「此離れは誰にも見せないのだ。サア水をかけてやれ。」
刺青師は倒れて居るドール孃のきものを無理にぬがせにかゝつた。坂上はドール孃をはなれて只默つて見て居た。上半身を裸にして刺青師は水を注ぎかけた。

「どうせ、きものもぬれるのだ。」
水が殆ど全身にかけられた。かすかにドール孃が目をあけた。
「ドール孃！　氣がつきましたか。」
ドール孃は無言のまゝ美しいまなざしを坂上に送つた。
「サア、わしはきものを持つて來る。それ迄二人だけだよ。」刺青師がその時獨語の樣に云つた。
刺青師は手桶をさげて室を出て行つた。坂上は倒れたまゝのドール孃の顏を見入つた。
ドール孃氣がつきましたか。」
ドール孃は靜かに起き上つた。上半身のあらはなのを氣づかぬ樣に、ヂッと坂上を見つめた。
「ドール孃！」
「坂上さん。私は夢を見ました。此世の夢を今見ました。」
「夢？」
「えゝ、夢なのです。男の情を見ました。」
「ドール孃！　もう何を云つてもいけない。云はぬ方がいゝのです。」
二人はヂッと顏を見合せた。五分十分と時が過ぎた。ドール孃はしづかに自分の上半身が露出して居るのを見た。そして坂上が全裸身で居るのをも見た。

た。

二人の呼吸が相合うてかすかに聞えた。二人はチッと見合つた。突然障子の外に聲がした。

「それ着物。」

スル〳〵と障子が一二寸あいて派手な初秋のきものと帶が投げ込まれて又障子は立てられて了つた。

七

「キモノ！」

ドール孃は吸ひつく樣になげ込まれた派手のきものを見つめた。

「おきかへなさい。」

坂上は親しく云つた。

「えゝ。」

あどけなくドール孃はぬれた衣類のまゝ立つた。そして惡びれもせずにスル〳〵ときものをぬぎ捨てた。

全裸身になつて彼女はスッと立つた。そして坂上を見ながらほゝと笑つた。そして一寸頸をかたむけて云つた。

「坂上さん。私の刺青を見て下さい。」

坂上はすひつく樣に彼女の內股の蛇を見た。純白の肌に蛇はとぐろをまいて、紅い舌をベロリと出して居た。

「愚の人ぢやありませんか。小林は此蛇を今でも恐れて居るのですよ。そして一層あなたを恐れて居るのですよ。」

「當然です。ですからあなたは出來るだけ祕密を守つて居なければいけなかつたのです。」

「さうでせうか。」

「さうですとも。」

坂上が二三歩ドール孃に近づいた。

「キモノを。」

「えゝ。」

坂上は順次に下着からキモノをきせてやつた。そして帶を高く結ぶ時には男力でギュッとしめてやつた。

「はゝ、日本むすめが出來ました。」

ドール孃は自分の姿に見とれてあちこちと見廻して居たが急に飛鳥の樣に坂上にとびついて來た。

「いけない！」
と坂上は兩手でさへぎつた。
「小林夫人は歸るのです！」
坂上は叱る樣に云つた。急に我に返つたドール孃の眼に涙が光つた。
「お歸りなさい。お歸りなさい！」
坂上が又どなつた。
「さうですよ。お歸りなさいよ。」
と奇妙なアクセントで刺青師が障子をあけた。
「フランス語も知つてるだらう。」
刺青師が何事もなかつた樣に入つて來た。
「お歸りなさい。そして日本のキモノを買つて來たと小林さんを喜ばせて置くのです。」
「自動車も來て居る。」
刺青師が云つた。ドール孃は男二人の力ある言葉に動かされて室を出るしかなかつた。彼女はぬれた洋服を捨てゝ室を出て行つた。男二人は眞顔になつて足音の遠のくのを待つた。下駄の音である。
「又續けやうよ。」

刺青師が云つた。
「あゝ、たのむ。」
と坂上が又位置について脊をまろくした。刺青師が又針をとつた。
「ほりものをする位のものはみんな眞劍なんだ。昔の人は眞劍だつたのだ。今の奴等は、何をするにも本氣でないのだ。」
「さうだらうか。」
「さうだよ。わしの所へ來るものは、みんな眞劍なんだ。眞劍で苦しむもの、眞劍でたのしむもの、とにかくみんな眞劍だよ。」
「俺も眞劍かな。」
其言葉の終らぬ時、刺青師は針を深くさした。
「あゝ本氣だ。」
「あいた！ッゝ。」
「それ見ろ、眞劍でないから痛いんだろ。馬鹿だなお前は。何で女をあのまゝ歸したのだ。男は男らしくやるものだ、人の心も知らねえで。……あゝもうお前はやめだよ。」
刺青師は針を投げ捨てゝ歎息をした坂上は驚いて後をふり向いた。

「惡かつた。大將、勘辨してくれ。」
「本氣であやまるか。」
「さうか。お前は可愛い男だ。お前にほれない奴は人間でない。今の女だつてほれてたぢやねえか。何故歸したのだ。」
坂上は振り向いた。
「歸しちやうそかなァ。」
「うそだとも。まァいゝや、今日は勘辨すらァ。」
坂刺青師は又針をとりあげた。
今日はおらァもうやめて貰ひたいな。自分が分らなくなつちやつた。
坂上はサッサと印袢纏をきて了つた。刺青師はあつけにとられて坂上を見た。
大將、ほんとにおらァ自分が分らなくなつちやつたよ。おらだつて男だ。ほれた女を他人に渡すなアいやだ。又今の女だつてたしかにおれにはほれて居る。けれどもおらァ相ほれになつても、それから先の事をどうしたらいゝのか分らねえのだ。おらァ滅茶苦茶に此世界を渡り歩いた男だし。其日暮しで來た男だ。その男が此頃になつて自分がチョイ〳〵と頭を出して、眞面目の考へが出て來るので困りきつてるのだ。一體どつちが本當の俺なのか分らねえのだ。それが心配で何も本氣で出來ねえの

だ。苦しくはねえが困りきつてるのだ。性格破産者つて云ふのだらう。」
坂上は頭をかゝへて默りこくつて了つた。

八

「おいお前泣いてるのか。」
刺青師が默りこくつて居る坂上の頭の上から云つた。
「泣けるものか。泣ける位ならばまだいゝや。泣く氣にさへなれねえのだ。」
坂上はキョトンとして顏をあげた。
「どうする積なんだ。」
「どうも出來ねえ、このまゝさ。」
「一體刺青を何のためにするんだ。」
「あの女に金をやるためにだ。」
「何の金をやるのだ。女を金で買ふのか。」
「いやだぜ。そんなけちな考へはねえよ。」
「けちだ？。何がけちだ。金で買へる女を金で買ふのが何でけちだ」

「さうか。さう叱るなよ。」
「金で買ふのぢやねえのだ。」
「そんならどうするのだ。」
「あの女と相ほれの男があるのだ。それでその二人が巴里へ歸りたがつて居るから、其旅銀をくれたのだ。」
「相ほれつてお前だらう。」
「違ふ。俺ぢやねえ。」
「何？　お前ぢやねえつて。たつた今お前はあの女にほれてる。女もお前にほれてるつて云つたぢやねえか。」
「そいつがよく分らねえのだ。」
「いやになつちまうな。女の心がお前には分らないのか。」
「女どころか自分の心さへ分らねえのだ。」
「あきれた野郎だな。まアいゝや。分らねえものは仕方ねえ。いづれ分るだらう。だが刺青と金とはどう云ふ譯なのだ。」
「刺青を賣るのだ。」

「賣る？。賣るとはどうするのだ。」
「きまつてらァ、死んで皮を賣るのさ。」
「お前死ぬ積なのか。」
「あゝ、さうだ。」
「分つた。ではお前は命を女にやらうと云ふのだな。」
「さう云ふ譯になる。」
「そしてお前の命をもらつた女はどうなるのた。」
「相ほれの男と幸に暮すのだ。」
「相ほれはお前ぢやねえのか。」
「さう考へると俺ぢやねえ。」
「さうか。俺にはお前の心は分らねえが、それはとにかくとして、金はどうしたのだ。」
「もうくれちやつたのだ。」
「呉れた？　あの女にか。」
「あゝ。」
「さうか。それぢや金の手前お前にほれてるのだな。」

「さうぢやねえ。たしかにほれてるのだ。」
「おい。お前も少ししつかりしてくれ。女がお前にほれてると思ふならば、お前死ぬのはやめなくちやうそだぜ。」
「さうかも知れないが、今ぢやもうおそい。」
「おそいものか。命を金で買ふ奴がそも〳〵間違つてるのだ。そんな金は踏み倒してもいゝものだ。」
「さうだらうか。」
「さうさ。たしかにさうだ。何者なのだ、お前の命を買つた奴は。」
「強盜團の首領だ。」
「さうだらうな。どうせそんな奴等だ。」
「だが、其首領は俺に同情をしてくれてるのだ。」
「それなら尚更ぢやねえか、踏み倒さずにかりて置けるぢやねえか。しつかりしなくちやあ駄目だぜ。」
「だが、俺はもう駄目なんだ。刺靑だけ殘す方が世の中のためらしい。」
「馬鹿を云ふなよ。ようく今夜考へて見るがいゝ、女一人自由に出來なくてどうする。」
「しようと思へば出來るんだがなァ。」

「出來るならやつたらばいゝぢやないか。」
「それは理窟だぜ。」
「理窟ぢやない、俺は人情を云つてるのだ。男の心を云つてるのだ。男つて云ふものは女だけはどうでもなるものだ。元氣を出せ。」
「おれだつて今迄はみんな思ふ通り女を自由にして來たのだ。自由に出來るものだと思つて來た。だが今度だけは駄目だ。」
「お前女に本氣でほれたのだな。」
「さうだ。本氣でほれたので、思ふ通りに出來なくなつて了つたのだ。」
「さうだらうな。本氣でほれちやァ駄目だ。お前から見れば、あの女の別の相手の方が一枚役者が上だぞ。」
「さうらしい」
「さうらしいもないものだ。かうは云ふが俺も若い時があつたよ。俺も一度女にほれちやつた。そのためにこんな暮しをする様になつたのだ。女にほれると出來るだけ自分に損になる様に、苦しむ様にと心懸けて來るものだ。お前もさうなのだ。」
「ほんとだなァ。今更仕方ねえ。」

「仕方ねえかも知れねえ。だが惜しいものだ。女は男にほれゝばきつと徳をする。男は女にほれゝばきつと損をするのだ。命も捨てなくてはならないのだ。男は損だなァ。」
「損だ。ほんとに損だ。」
二人は淋しく笑ひあつた。

最後の解決

一

氣まづい秋のあけくれが、ドール孃と小林との間に續いた。
金策に疲れて足をひきずりながら京都の町から郊外の大友畫伯のアトリエ迄歸る路々、小林は何度引き返さうとしたか知れない。
――あの氣づまりな、不愉快な屋根の下へ――
と彼は停留場に電車のとまる度に、電車から飛び降りて了ひたくなつた。
――今頃は又あの薄氣味の惡い刺青の男が來て話して歸つた後かも知れない――
かう思ふと、このまゝ歸らぬ譯にもならなかつた。これで歸らなかつたならば、彼女はいゝ事にし

て自分を離れて行つて了ふのであらう。それは小林には矢張り惜しかつた。
小林の重い心をのせたまゝ、電車は大友畫伯のアトリエの近くの停留場にとまつた。小林は仕方なく電車を降りた。
それは秋の夕暮の、蜩の鳴きやんだたそがれ時になつて居た。ふと見れば、たつた今不愉快にみちて考へて居た事件がまのあたりに發展して居た。
ドール孃と刺青の男とが立つて話して居た。然も二人ともいかにも別離を惜しむ樣に、下向きになつて話して居る。
小林はそれを見るに堪へられなくなつて、後から來る電車を待つて居た。思ひきつて又電車の終點迄行つて了ひたかつた。
わざと二人の方を見ずに小林は今灯つたばかりの電燈の下に立つて居た。氣になる二人の話聲が近づくやうに感ぜられる。
――もう最後だ。思ひきつて心にあるだけを云つてやらうか――
と小林が思つて後を振り向いた時、刺青の男の聲がした。
「小林さんではありませんか。」
小林は逃げる譯にもならなかつた。日本語で問はれたのに、故意にフランス語で答へた。

「さうです。あなたは？」

分つて居ながら皮肉にきいたのである。

「坂上ですよ。今お留守に上つた所です。」

かう云つて刺青の男はドール孃を見た。ドール孃は小林に二三歩近づいたが、胸にとびついて接吻する氣になれなかつた。

「マルゴ、おれは又電車に乘るのだ。」

「又？」

ドール孃は不思議さうに小林を見た。坂上が口を入れた。

「お歸りになつたのではありませんか。」

「えゝ、歸る積りで降りたのですが、又いやになつたので終點迄行きたくなつたのです。」

小林はかう云ひながらいよ〳〵不愉快であつた。

「いかゞでした。金策はうまく行きましたか。」

坂上の問を小林は皮肉にとつて腹が立つて來た。

「うまく行く道理がないぢやありませんか。絵でも豫約するならば金の出し手もありませうが。」

「ドール孃の裸身像は？」

坂上は深い考へもなくかう云つたのであつたが、小林にはます〳〵腹を立たせるための言葉にとれた。

「此女はもう駄目ですよ。たとひボーズしたつても私の氣がすゝまないからろくなものは出來やしませんよ。」

坂上は此言葉ではつきりと、ドール孃と小林との關係が破綻に近づいて來て居るのを感じて、默つて居るしかなかつた。

「何故です。私は喜んでボーズすると行つて居るではありませんか。」

ドール孃はかなり不服らしい句調で云つた。

「駄目だ。すべては終りなのだ。お前の裸身像はホフマンが旣に畫いて居るぢやないか。」

小林は五六日毎夜云ふ言葉をくり返した。

ドール孃はかう云はれて悲し氣に小聲で云つた。

「すべてを許すと昨夜あなたは私におつしやつたでせう。」

ドール孃は小林の胸に兩手をあてゝ、小林の顏を見あげた。小林はドール孃の存在などは全く忘れた樣に、冷やかな態度で坂上に向つた。

「坂上さん、あなたは今日何の用事でアトリエを訪ねて來られたのです。」

坂上はすぐに答へた。
「あなた方お二人がいつ日本をお立ちになるかを伺ひに參つたのです。」
「さうでしたか。私達二人の事は私達だけの自由にして下さいませんか。」
「勿論それはさうですが、私もあなた方お二人のために一萬圓を造りましたので、心配になつたのです。」
「一萬圓？　それは私には……すくなくも私には關係のないものです。マルゴには關係があつても。」
「あなた、あなた……」
ドール孃は堪へられなくなつて小林の胸にしがみついた。
坂上は默つて二人の樣子を見たまゝであつた。

二

「あなた。あなた。どうしてあなたは坂上さんをそんなに苦しめるのです。」
ドール孃の言葉の終りの語調は小林をいくらか難ずる樣に聞えた。
「何をお前は云ふのだ。お前はお前の思ふ通りに坂上さんに感謝して居ればいゝのだ。俺は俺で思ふ通りの言動をとるのだ。坂上君、僕は今夜はつきり云ひます。將來あなたは私達二人の事に無關心で

あつて下さい。」
「それは出來ませんよ。」
坂上はきつぱりと云つた。
「出來ない？　何故です。」
小林は胸にとりついて居るドール孃を押しのけて坂上に肉薄した。
「理由は明白です。私は私の心を僞る事は出來ないのだ。私はドール孃を愛して居るんです。」
小林は憤激の極度に達した。
「餘計な事はやめてくれ。」
「やめられない。それは私の自由だ。」
「何？」
小林はもうフランス語で間に合はなくなつて日本語で云つた。
「あなたがドール孃を愛して居ようが、又ドール孃があなたをいくら愛して居ようが、そんな事には關係がない。私は自分勝手にドール孃にほれてるんだ。それが何故惡いんです。」
「惡いぢやないか。餘計な事ぢやないか。」
「惡くても餘計な事でも事實だから仕方ない。」

坂上はつきりかう云つて憤慨の極ぶる〳〵ふるへて居る小林と對峙した。
「ふん、さうか。それならそれでいゝ。だが私の留守に此女を訪問するのは止めたらばどうだ。」
それは成程やめよう、ではもうドール孃を訪ねない。だが最後に云つて置く。君も男ならば男らしくドール孃を勢一杯に可愛がつてやつてくれ給へ。」
「餘計な事を云はなくてもいゝ。」
「いや餘計ぢやない。愛するドール孃の幸福のために僕は云ふのだ。」
電車が來た。坂上は挨拶もせずにそれにとび乘つた。ドール孃が驚いて後を追ひかけた。小林がドール孃に追ひついて後から抱きとめた。
電車が發車して遠くなつた。ドール孃はしばらく電車を見送つて居た。小林はソッとドール孃から手を放した。
「マルゴ。」
小林がよんだ。
「はい。」
「ドール孃は初めて後を振り向いた。
「お前、あの男を愛して居るのか。」

ドール孃は何とも答へなかつた。小林は靜かに歩き出した。ドール孃もその後に從つて歩いた。
闇の中を歩きながら二人は何も話す氣になれなかつた。二人の足音だけが闇の並木に反響した。アトリエの灯が近づいた時。小林がやつと口をひらいた。
「マルゴ、家に入つて今夜はすつかり話して凡てを解決しよう。」
「えゝ。」
小林が玄關に立つて呼鈴を押した。眠たげな女中がドアをあけた。二人は疲れきつて應接間に入つた。又も二人は沈默の時が續いた。
小林はいら〳〵して居た。ドール孃はすべてが煩はしくなつて、早く巴里へ一人でも歸りたくなつた。さう思ふと懷にある一萬圓が有難くなつて來た。
「あなた。私の身を自由にして下さいませんか。」
「私もう、日本がいやになりました。」
ドール孃が云つた。小林は默つて腕を組んだまゝである。
小林もいつともなく悲しくなつて來た。
「あゝおれも日本がいやになつたよ。」
「でもあなたは國です。」

「だから尙更いやになつたのだ。」
二人は又默つて了つた。しばらくして小林は獨語の樣に云つた。
「何とかうまい解決はないだらうか。」
「お別れするしかないでせう。」
ドール孃が淋しく云つた時、小林が急に顏をあげた。
「マルゴ、今夜はかくさずに云つてくれ、お前は坂上を愛して居るのぢやないか。」
ドール孃は一寸默つて居たが、絕望的の語調で云つた。
「私には何も分らなくなつて了ひました。」
「さうか。」
小林も絕望して云つたが、尙後をつづけなくてはならなかつた。
「お前はもう俺を愛して居ないのか。」
「それは愛して居ます。」
「同時に二人の男を愛する事が出來るかね。」
「キリストの愛ならば……」
と云つたがドール孃自身にも此言葉は分らなかつた。小林には尙更分らなかつた。が二人ともにま

すます絕望のため息を洩らした。

三

「どうしたらばいゝのだらう。」
小林か絕望の底から尙一縷の光明を見出したくて云つた。
「どうしていゝか私にも分りません。」
「二人に分らなくて誰が解決してくれるのだらう。」
「時が解決するでせう。」
「時か？　時と云ふ冷やかの道化役者が勝手に解決するのか。そして其道化役者の思ふ通りに二人はならなくてはならないのか。……一體お前はどうして日本へ來てすぐに俺を訪ねなかつたのだ。」
「蛇が恐しかつたのです。蛇の刺靑をあなたに知られるのが恐しかつたからです。」
「さうか。ホフマンが恐しかつたのだな。」
「さうです。あの惡魔が二人の仲をさくのを恐れたのです。」
「そして今は又あの刺靑の男が俺を苦しめる事になつたのだ。」
「刺靑の男は決して意識的にあなたを苦しめはしません。」

「それはさうだが結果に於てはあきらかに故意にやつてる事になる。」

「さうでせうか。」

「あゝ、さうだ。俺は今になつてはお前の身に食ひ込んで居る蛇よりもあの刺青の男の方が恐しいのだ。心をかくさずに云つてのけるあの男が氣味が惡いのだ。其物凄さのために、俺のお前を愛する情は毎日の樣に冷えて行くのを俺は感じて居る。殘念だが仕方ない。」

「さうおつしやれば私だつてさうです。あの人のために私もあなたを愛する心が冷えて行くのです。」

「それでお前は俺から離れても、女だからお前を眞劍に愛する男に愛を移して行く事が出來るだらう。そしてお前とあの男とは相思の仲になるだらう。それが時のもたらす解決なんだ。」

「私はさうばかりは思ひません。あの人は私を愛して居るとは云つて居ますが、あの人は本當に自分で自分の心が分る人ではありません。世の中をごまかして渡つて來た人です。其人が今になつて急に眞面目になつたつても、それは到底駄目な事です。ごまかしをやつて居る自分が自分なのか、それとも眞面目の自分が自分なのかゞ、あの人は分らないでせう。つまり舞臺に立てる自分が自分なのか、實社會に居る自分が自分なのかゞ分らなくなつて了つた役者です。性格破産者です。私を愛すると云つても、それはあなたやコエンスキーや刺青師やらが登場して居る舞臺だけで私を愛して居るのかも知れないのです。あの人は今夜も自分で云つて居ました。……私はワガボンドだ、ドン・キホーテだ。身の故里も

なければ、心の故里もない。私は今故里をもとめて居る。その故里はドール孃かも知れない。……かう云つたかと思ふと、すぐに云ふのです。……だが本當の故里などは人間にはある筈ない。其時々に故里らしいものが出て來るのだ。……と云つて絶望的の長大息を洩らすのです。その話をきいて居る中に私も變になつて來て了つたのです。それから私はあの人を歸したくなつて送り出したのです。」

「とにかく氣味の惡い男だ。」

小林も氣味惡さにうすら寒くなつて來た。

「そればかりではありません。まだお話ししずに居ましたが、私は五六日前にあの人が刺青をして貰ふのを見に行きました。あの人は太い針で皮膚を刺されながら何とも云へず快感を感じて居るのです。私はそれを見て居る内にふと思つたのです。あの人は私を愛すると云ふ言葉を近來特にあなたに向つて主張して居ます。それは私達が相思の仲だと知つて居るので尚云ふらしいのです。そして自分で故意に悲しい位置に陷つて、それで滿足するのでないかと思ふのです。自分の刺青を賣つたと云ふのも、私に對する好意と云ふよりはめつたと誰も落ちぬ悲しい破目に自分を落したい慾望からではないかと思ひます。あなたはさうはお思ひになりませんか。」

「うん。……」

小林は段々と心のとけて行くのを自ら感じた。

「もしお前の云ふ通りならば、時の解決等を私達は待つ事はない。」

「さうでせう。私達はあの人の好意を喜んで、うけて貰つた一萬圓で巴里へ行けばいゝのです。」

「さうかも知れない。だがどうも一萬圓は氣持が悪いな。或は其一萬圓は俺達二人の生涯につきまとつて來る魔物となるかも知れない。お前の身に食ひ入つて居る蛇よりも尚氣味の悪いものになるかも知れない。

二人の疲れた頭腦には氣味悪さばかりがはびこつて來た。

「思ひきつて返して了ひませうか。」

「さうだな。」

二人はます〳〵氣味悪くなつてより添つて了つた。

四

東京帝大の解剖學教室の玄關にハイカラの洋服に身をかためて、刺青の男が立つた。小使室の小窓をあけて彼は名刺を出した。

「私はかう云ふものですが、教授にお目にかゝりたく存じます。」

小使は名刺を一寸見た。

「先生は二人おいでになりますが……」

「大先生は？」

「小原先生ですな。」

「えゝ。一寸お願ひ致したい事がありまして突然上りましたのですが、お暇はとらせません、一二分でいゝのです」。

小使が名刺を持つて階段を上つて行つた。程なく小使が階段を下りて來た。

「どう云ふ御用ですか、一寸御名刺に書いて下さいとおつしやいます。」

「あゝさうですか。」

坂上は小使の返した名刺に「刺青賣却の件にて。」と書いた。小使は一寸名刺を見たまゝ又階段を上つた。

再び小使が階段を下りて來る迄坂上はかなり心配して居た。

「どうぞ。」

坂上は幸にも教授の室に通された。

「私が小原ですが御用は。」

教授は椅子をすゝめながら白髪童顔で坂上を見つめた。

「突然伺ひまして。實は背中にある刺青を賣りますにはどう致したならばいゝかを伺ひに參りましたのです。」
「は？」
教授は奇妙な問に返事を躊躇した。
「刺青のある皮膚をそのまゝはがす事は出來るものでせうか。」
「それは出來ます。」
と云ひながら教授ば大分好奇心を持つて來た。
「いや此教室にも大分あります。特に世界で有名な逸品もないではない。何ですか刺青のある死體でもあるのですか。」
「いゝえ、死體ではないのです。私なのです。」
「え？　あなたが？」
「えゝ、私なのです。」
教授は喫驚して坂上を見つめた。
「實は私が脊中にある刺青を人に賣つたのですが。」
「それはどう云ふのです。」

「金が入用でしたので。」
教授は坂上の精神狀態を疑つて來た。
「それは珍らしい事ですな。ではあなたの脊中の皮膚をはがす譯ですな。」
「さう出來ればいゝのですけれど。」
教授は坂上を精神病者ときめて了つた。
「そりや出來ませんよ。」
と云つて教授はテーブルの上の呼鈴を押して後アームチエアをくるりと廻した。
「一寸失禮します。」
教授はメモの紙を一枚はいで何かペンで字をかいた。小使がドアを打つて入つて來た。
「此れを山岸君の所へもつて行つてくれ。」
小使は出て行つた。
「實際買手があつたのかな。」
教授が續けた。
「もう金の授受はすましたのです。」
「ふん。」

山岸教授が入つて來て小原教授に並んで腰を下ろした。小原老教授は一寸山岸教授に目くばせをした後云つた。
「此方が刺青を賣つたのださうだ。……であなたその刺青を私に見せて下さいませんか。」
「えゝ、どうぞ。」
坂上は立つてコートをぬぎワイシャツをとり出した。二教授は其間に小聲で何か話して居た。
坂上はワイシャツをぬいでコンビネーゾンの肩をはずして、二教授に背を向けて立つた。美しい刺青が純白の背にをどつて居た。二教授は感嘆の聲をもらした。
「成程立派なものだ。」
「素的ですな。」
坂上は靜かに椅子に腰を下ろした。
「如何でせう。相當に價値がありませうか。」
老教授が云つた。
「立派のものです。何處でやつたのですか。」
「ハワイです。」
「道理で日本的でない。それでどうなさるのですか。」

「實は一萬圓で賣つて了つたのですか、なるべく瑕をつけずに買人に渡したいのです。その工風を伺ひに參りましたのです。」
「さうですか。それはなか〱六ケしい事です。買人はすぐによこせと云ふのですか。」
「いゝえ、さうではありません。勿論死後なのです。」
「ふうん。珍らしい事件だ。」
「それで。」
「私が死んだ後で、此の教室で皮膚をはいで戴けないでせうか。」
「それはしてあげませう。」
老教授がかう云つた時、山岸教授がおどろいて老教授を見た。老教授はかすかの笑を眉に見せて何事かを語つた。
「それで安心しました。」
坂上は一禮して室を出て行つた。

五

刺青の男が小原老教授を訪ねて來て以來三日目になつた。それ迄老教授と山岸教授とは時々刺青の

男の噂をした。

「氣狂ひだらうな。」

「さうでせうね。混血兒ですね。」

「さうだよ。だから一層刺青がひきたつて見える。欲しいものだな。」

「ほんとですな。今度來たらば住所をきいて置きませう。」

「だが、わしよりは永生きするだらうから、君だけのたのしみだらう。」

「まさかさうでもないでせう。」

まだ學生が集まらぬので講義は初まらなかつた。老教授は近く初まる新學期の講義の草稿を整理して居た。秋の午後の日ざしが傾いて居た。其の時小使が老教授の室へ入つて來た。

「先生只今電話が參りました。先日お見えになつた坂上さんと云ふ方がも一度是非お目にかゝりたいので上つてもいゝかとおしやいます。」

「坂上?」

教授は一寸考へたが、すぐに刺青の男であるのを知つた。教授は稍うるさくはあつたが、彼の刺青が世にも稀なものであるのを思つて思ひ直した。

「あゝ、すぐにおいで下さる樣にと云ひ給へ。それから山岸君に一寸來る樣に。」

「はい。」

「小使は室を出て行つた。

「山岸教授が入つて來た。老教授はすぐに云つた。

君、又來るよ。例の問題の男が。」

「さうですか、又見てやりませう。そしてよく話して寫眞でもとつて置きませうか。」

「それもよからう。だがあれこそ教室の寶としたいものだな。」

「何とかなりますまいか。」

「一萬圓で賣つて了つたと云ふのでは、手も出ないよ。」

「だがそれは噓ではありませんか。そんな事を云つて、生きてる內から此教室へうり込む積ではないでせうか。」

「さうも考へられる。さうとすれば氣狂ひ所ではない。なか〳〵悧巧な男と見えて來る。」

「今日はよく問ひつめて見ませう。」

ドアが打たれて小使が入つて來た。

「此方がお見えになりました。」

小使の差出す名刺には「刺青の男」と書いてあつた。

「あゝ、お通し申せ。」
小使が去つた後老教授は山岸教授に彼の名刺を渡した。
「なか〳〵徹底した男ではないか。とにかく愉快なものがとび込んで來たよ。」
老教授はドアを見つめた。ドアがあいて今日は紋付羽織になつて坂上が入つて來た。
「先日は失禮しました。又今日も御多用の所を上りまして。」
「いや。さアおかけ下さい。」
「で、いよ〳〵刺青の解決をつける事になりました。」
「はア。」
「つまり買人に渡す事になりましたのです。」
坂上は眞面目な顏をして云つた二教授は何を坂上が云ふのか分らなかつた。
老教授が坂上の言葉に疑ひをもつて考へて居た時、山岸教授が口をひらいた。
「あなたはどう云ふ人に刺青をお賣りになつたのです。」
此問は老教授にも興味をひくに十分な問であつた。
「變な奴に賣つたのです。先づ誰でも買手がないのが普通ですからな。實はアメリカ人に賣つたのです。アメリカ人でゝもなければ買つてくれません。」

山岸教授はいよ〳〵面白くなつて來た。
「アメリカ人ですか。一萬圓でしたな。」
「さうです。それに一萬圓は高すぎます。」
「いやさうでない。」
老教授が口を入れた。
「一萬圓でも安いです。一體金錢では評價出來ない種類に屬するものです。」
「さうでせうか。それに唯のアメリカ人ではないのです。アメリカの强盜團の主領に賣つたのです。」
「强盜團？」
「えゝ、PPRと云ふ寶石强盜團です。」
山岸教授は二三日前の新聞に出て居たのを思ひ出した。
「まだつかまらないのですか。今頃はつかまつて了つたでせう。」
かう云ひながら山岸教授は坂上が噓を云つて居ると信じて了つた。
「もうつかまりましたよ。だからあなたの刺青の買手はもうない筈です。」
「いゝえ、まだつかまりません。それにたとひつかまつたにしても金を私はうけとつて契約書を取り交してありますから、所有權は彼にあるのです。」

坂上の言葉は眞面目一方であつた。

六

山岸教授はまだ坂上の云ふ事を信じなかつた。

「それにしても、もし萬一PPRがつかまつて了へばあなたとの契約は當然無効になるでせう。だからどうです。あなたは私達に刺青を賣つてくれませんか。」

「それは出來ません。」

「實は小原先生と先日來話して居たのですが、あなたの刺青は實際國寶です。だから是非此教室に保存したいのです。それは勿論あなたの死後の事ですから、いつの事か分らないが、それでもあなたが生前に承知さへして居て下されば、そしてその事を刺青の隅にでもほりつけて置いてあれば、學問のためでもあり、又あなたの名も殘ると云ふものです。どうです。承知して下さいませんか。」

坂上は山岸教授の熱心さに大分動かされて來た。

「さうですか。私は只金が必要だつたのでPPRに賣つただけなのです。PPRの首領さへ承知すれば、どちらでも私はいゝのです。」

「それは有難い。私がかう熱心になるのも、學問のためなのです。」

「ではかうお約束しませうか。PPRが承知するならば、こちらへお渡しする事にします。だが私は金が入用なのです。」

「どの位ですか。」

山岸教授は自分の想像が的中して、PPRに賣つたなどゝ云ふのは全く嘘であると思つて了つた。

「それは私自身には分りません。」

「誰にきけばいゝのですか。」

「今その人が此處へ來る筈です。」

山岸教授はいよ〳〵自分の思ふ通りであるのを信じた。PPRなどゝ云ふ事を云つて實は刺青を賣りに來たのであるのを思つたのであつた。さう思ふと山岸教授は刺青の男をからかつて見たくなつた。

「PPRからとつた一萬圓はどうなさつたのですか。」

「人に呉れたのです。」

坂上の答はいよ〳〵山岸教授をして思ふ通りであつたのを感じさせるに十分であつた。

小原教授は先程からの會話を興味多くきいて居たが、大體に於て事が成功したのを知つて喜ばしくなつて、口を開いた。

「あなたはどう云ふ御商賣なのですか。」

「私ですか。私は今は何もして居ないのです。强ひて云へば刺青賣りが商賣でせう。もう賣るものは刺青しかなくなつたのです。」

「いや、愉快な商賣ですな。」

「あんまり愉快ぢやないのです。刺青を賣るのは命を賣るのですからな。」

坂上の眉には一沫の淋しさが浮いて居た。

「寒くはないですか。」

肌ぬきで居る坂上に老教授が注意した。其時、ドアが打たれると同時にドヤ〳〵と人が入つて來た。突然だつたので教授達は喫驚して入口を見つめた。

老教授の令息の小原君が眞先に立つて居た。其後にドール孃と小林とが續いて居た。

老教授も山岸教授もしばらくは言葉が出なかつた。

「何だ、お前は。」

と老教授が令息に云つた時には坂上は既に肌をかくして立上つて居た。

「皆樣突然でびつくりなさつたでせう。」

坂上の言葉には誰も返事をしなかつた。山岸教授は四箇月近く遇はなかつたドール孃を見て甚だしく驚いて居た。

「先生、サア刺青の代價をきめる人が來ました。」

坂上は山岸教授にかう云つて後スラ〳〵とフランス語でドール孃に向つた。

「又私の刺青の買手がついたのです。入用だけ云つて下さい。」

ドール孃は薄氣味惡くなつてぶるぶると身をふるはせた。山岸教授が心をおちつけて云つた。

「ドール孃！あなたは此人を知つておいでになるのですか。」

ドール孃の答を待たずに坂上が行つた。

「知つて居られますとも。一萬圓をあげたのは此ドール孃なのです。」

すべての人々が意外の邂逅と意外な言葉とのために呆然として坂上を見つめた。

「これはどう云ふ譯なのだ。」

老教授がうなる樣に云つた後は又重苦しい沈默が續いた。

坂上が立つたまゝゆつくりと云ひ出した。

「みんなお話するのは今です。すべてをお話する義務は私にあるのです。ドール孃は小林畫伯と相思の仲です。巴里で同棲生活をして居た方達です。ドール孃は小林畫伯に逢ひたくて日本迄來たのです。がドール孃には一つの祕密があつたのです。此祕密を抹殺するのも亦ドール孃が日本迄來る一つの理由だつたのです……」

其時ドアが打たれて小使が入つて來た。坂上は老教授に近づく小使を見て、老教授に云つた。
「森と云ふドクトルでせう。通して下さい。」
老教授は小使の出す名刺を見た。
「お通し申せ。」
しばらくの沈默が續いた。

七

森ドクトルが入つて來た。坂上はすぐに云つた。
「森先生。御苦勞でした。」
森ドクトルは此場の樣子に驚いて立つたまゝであつた。
「ドール孃は其祕密のために、すぐに小林さんに逢へなかつたのです。それでやむなく山岸先生、あなたを便つて上陸したのです。小原畫伯はドール孃が小林畫伯を戀して居るのを知つて居たのです。それをドール孃に少しほれたので小林畫伯にもドール孃にもお互の住所もドール孃の日本へ來て居る事も話さなかつた。がたうとういつともなく小林畫伯はドール孃の日本に來て居るのを知つて了ひました。

ドール孃の祕密と云ふのは內股にある蛇の刺靑です。その刺靑は大戰前にドール孃と同棲して居た獨逸の畫家が、別離にのぞんで、永久にドール孃の肉體だけでも所有したいために施した刺靑です。ドール孃は此刺靑を小林畫伯に知られるのが恐しくて、森ドクトルにたのんで雪狀炭酸で抹殺して貰ひたかつたのです。意識のあるまゝ森ドクトルに刺靑を見られるのを恐れたために、ドール孃は痲醉劑を用ゐる事を森ドクトルに依賴したのです。森ドクトルは昏醉して居るドール孃の內股に蛇を見出した。……森ドクトル、あなたもドール孃の肉體には誘惑されたでせう。……だが醫師の良心に阻けられて了つたのだ。それを考への足りない小林と小原の馬鹿が勝手に解釋して、森を赤坂の待合におびき出してなぐつたのだ。……」
坂上のフランス語は一語一語亂暴になつて來る。皆は呆然としてきいて居る。
「……ドール孃も考へがなさすぎたのだ。昏醉中の妄想に追ひたてられて、森ドクトルの家を逃け出したのだ。まだ云つて置かなくてはいけない。小原はドール孃を度々誘惑したのだ。風上に置けない奴だ。……」
小使がドアを打つた。ドアがあくや否や坂上が云つた。
「コエンスキーが來たんだろ。PPRの主領が來たのだ。通せ！」
老教授は小使に目で合圖した。

「みんな悪魔だ。そして卑劣な心の持主ばかりなのだ。」

コエンスキーが入つて來た。

「コエンスキー、君もきいて居ろ。」

コエンスキーは坂上の樣子を見た後、ドール孃が居るのに驚いたが、一語をも發する暇もない内に坂上が續けた。

「ドール孃は森の家を逃げてコエンスキーに逢ふ機會が出來たのだ。コエンスキーはドール孃を祕書に雇つたのだ、……これ迄は俺の事でない。今から俺が俺の心をかくさずに話してくれる。……」

坂上の言葉の調子が亂れて來た。

「俺は一目ドール孃を見た時から眞劍でほれたのだ。だが俺は今迄本氣で女を扱つた事がなかつたのだ。ドール孃にだけは本氣でほれたのだ。だが俺は考へた。ドール孃と小林とは相思の仲だ。其二人を俺が邪魔をするのは大きな罪惡だと思つたのだ。俺は長い間自分の心を押へつけて來た。だが俺だつても男だ。ドール孃一人位何とか出來ない事はないと思つた。が俺は悲しい哉ワガボンドの生活になれて來た。俺の心は到底一人の女で淨められるものでないのを俺は知つて居るのだ。

コエンスキーは俺と同じにワガボンドだ。俺は破産したワガボンドだが、コエンスキーはまだ破産しない。コエンスキーは俺に云つた。貴樣も男だ。女一人自由に出來ないのかと云つた。俺は自分の

刺青を一萬圓で仲間のコエンスキーに賣つたのだ。その金を俺はドール孃に呉れたのだ。俺はドール孃と小林とが相思の仲だと信じて居たのだ。だから二人を巴里へ送る旅費として一萬圓をくれて了つたのだ。

それがどうだ。小林、お前は俺の心事を今でも疑つて居るのだらう。愛するならば愛する女をしつかりつかまへて居ろ。見ろお前が愛する女は、俺の刺青師を訪ねて來て、俺の刺靑されて居るのを見て。俺に心を移して了つたではないか。お前は何も知るまい。お前には知らせない位の智慧をドール孃は持つて居るのだ。貴樣は俺に此間京都の停留場で食つてかゝつたのをおほえて居るか。あの日に俺は完全に貴樣の愛人を俺のものにして了つたのだ。」

「あッ。」

と聲がした。腦貧血で倒れかゝつたドール孃をコエンスキーが後から抱きかゝへた。坂上はスツと動いてドール孃を抱いた。

「マルゴ、マルゴ。俺だ。俺が居るぞ。」

坂上はドール孃をしつかりと抱いた。ドール孃はしつかりと坂上の胸にしがみついた。

「しつかりして居ろ。」

坂上は氣のついたドール孃を抱いたまゝ、一同を見渡した。

八

ドール孃を抱きしめたまゝ坂上は又續けた。

「分つたか。みんな分つたか。女と云ふものは力にほれるのだ。意氣にほれるのだ。コエンスキー。お前は今日こそうれしいだらう。お前の心は今日こそすつきりしただらう。俺は、前に代つて皆に云つてやる。コエンスキーはPPRの首領だ。強盜團の首領だ。山から掘出して來た石ころに價値をつけて、それで富をほこらうとするふらちな奴共から支拂はずして石ころを盜みとる強盜なのだ。だがそれを又此世の馬鹿共に賣り拂つて。此世の下づみになつて居る可哀さうな奴共に金にしてくれてやるのを本領として居る強盜なのだ。富の平均を主義として世界を股にかけてあるくPPRの首領がこのコエンスキーと云ふ男だ。俺はPPRが日本に居るのを話してやつた。やつと二三日前になつて大騷ぎを日本では始めて居る。コエンスキーが日本などでつかまるものか、コエンスキーを強盜なるが故につかまへる積りになつて居る無智低能な奴等に、コエンスキーがつかまつてたまるものか。おい、コエンスキー。俺はお前のためにお前の行動を辯明してやつた。だがお前も大抵に考へなくちやアいけない。目的のためには手段を選ばないとお前は云つて居る。だが手段のためにお前の目的が中途で挫折したらばお前はどうしてあきらめるのだ。それぱかりぢやない。お前の云ふ目的のために手段を選ばないと云ふ言葉は勇ましくはあるが。やつぱりお前の心の淋しさをごまかす言葉だ。今でこそ立派な事を云ふが俺と歐洲の北の果であつた頃のお前を考へて見ろ。お前は強盜をするために強盜をやつて居たのだ。そして支拂はずして得たものゝやり場に困る程に手段が巧妙になつた時初めて、お前は目的のためには手段を選ばない、などと云ふ云ひ譯を考へ出したのだ。手段が惡いと思つて居るので、其心の淋しさをごまかす爲に目的を云ひ出したのだ。さうだらう。世界でこんな事をお前に云つてきかせるのは俺一人だ……」

ドアが打たれた。坂上がドアを見つめた。小使がドアをあけるや否や、坂上は大聲を出した。

「待て！　まだ早い。も少し待つ樣に云へ。小原先生が大丈夫ですから御心配なく、とおつしやつたと云へ。」

小使が坂上の劍幕に恐れてドアをしめた。

「マルゴ。マルゴ。」

坂上はしつかり胸に抱いて居るドール孃に云つた。

「お前には最後に云ふのだ。今云ふ言葉はお前を此世の中で一番愛して居る男の云ふ言葉だ。そしてお前が今本氣で愛して居る男の云ふ言葉なのだ。お前が慕つてはる〴〵來た日本には、決してお前のあこがれて來た樣なものは何一つないのだ。日本ばかりぢやない。世界中にお前のあこがれて居る樣

なものはありはしないのだ。唯是非一つ何かにあこがれなくては居られないならば、現在今の瞬間は俺自身だけがお前のあこがれの的になるものなのだ。お前はすぐにフランスに歸れ。フランスにもお前のあこがれるものはなからう、だがお前のあこがれの偶像だけはたしかにある。それは享樂生活だ。人生にあこがれの本尊があると思ふのが間違だ。あるのは偶像だけなのだ。さうだ。俺自身さへ實際はお前のあこがれの本尊ではないのだ。……」

ドアが荒々しく叩かれた。坂上はドール孃を抱いたまゝドアに近づいて、ドアの握りをしつかりと握つた。

「マルゴ、マルゴ。お前にはあこがれの本尊はないが俺にはある。それはお前だ。だが俺はお前のあこがれの本尊にはなれないのだ。……」

ドアがしきりに打たれた。老教授が靜かに立ち上つた。

「まつて下さい。もう一寸。……」

坂上はヂッと老教授を見つめた。其眼には涙が光つて居た。

「マルゴ、マルゴ。日本にはお前のあこがれて來たものは決してなかつたが、明日の日本を俺はお前に今見せてやる。……」

坂上は左手でしきりに打たれるドアの握りを押へながら右手でドール孃の身を支へて其唇に濃く

接吻した。

坂上の涙はドール孃の顏に點々と落ちた。坂上はヂッとドール孃を見つめた。

「マルゴ、明日の日本。今お前に見せてやる明日の日本はドン・キホーテの最後だ。それがおれの最後なのだ。……」

坂上は忽ちに右手をゆるめた。ドール孃が音を立てゝ牀に倒れた。と同時に轟然としてピストルが響いた。刺青の男が自ら腦天を打ち貫いて倒れた。其瞬間にドアが打ち開かれて十數人の警官が室の内に流れ込んでコエンスキーを捕へて了つた。呆然として立つ小林小原。飛鳥の如く坂上の死體に近づく山岸教授。老教授は倒れて居るドール孃をヂッと見下して居た。

（完結）

昭和三年一月廿四日印刷
昭和三年一月廿七日發行

著作者檢印

櫻咲く國
（定價金貳圓五拾錢）

著作者　正木不如丘

東京市京橋區南傳馬町二丁目六番地
發行者　和田利彦

東京市京橋區木挽町三丁目十二番地
印刷者　川村清次郎

東京市京橋區木挽町三丁目十二番地
印刷所　川安印刷所

東京市京橋區南傳馬町二丁目六番地
發行所　春陽堂
電話京橋六五二・四四一五番
振替口座東京一六一七番

529
208

[redacted]

3 年 2 月 6 日

調査済